2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽専修運営会	**氏　名**	秋山　理恵
職　位	教授	**作成日**	2025年3月15日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部:
専門実技（声楽）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
演奏実習Ⅰ、Ⅱ
フランス語ディクション　Ⅰ、Ⅱ

大学院:
歌曲研究（フランス）A Ⅰ,Ⅱ、B
Ⅰ,Ⅱ声楽研究 Ⅰ、Ⅱ

博士:
研究指導　Ⅴ、Ⅵ

初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
オフィスアワー等

高校生への教育
受験準備講習会

２　教育の理念

・本学の基本理念である「自由、自主、自律の精神」をふまえ、良識ある音楽家、教育家を育成することを目的とし、日本および世界の文化の発展に寄与するように心がける。
・個々の学生と信頼関係を深め、発声技術の習得のみならず、作品の背景や詩の意味を深く理解し、音楽を多面的に捉え演奏に活かす力を育むよう心がける。

３　教育の方針・方法

・音楽様式や詩の表現方法に見合った歌唱表現を追求し、学生がそれぞれの改善点に主体的に取り組めるように導く。
・音楽大学ならではの個人指導の利点を生かし、学生が音楽のみならずコミュニケーション力と判断力を学び、社会に貢献できる人材となれるようサポートする。

４　改善・努力
・学生が柔軟な心と身体で受講できるよう、普段からコミュニケーションを深めることに努めつつ、学生自らが能力（歌唱力、語学力、和声力、ソルフェージュ力）を高められるよう、学生の特性や美点を活かしながら導くことを日々大切にしている。 ・レッスンの為の予習復習時間が足りない学生が多かった。 ・授業アンケートの結果は必ず分析し、次年度の授業に活かしている。
５　評価・成果
・学生からの授業アンケートの結果で、概ね満足しているとの結果が出ている。
６　目標
・音楽が世界に与える必然性は恒久的であり、人々に感動を与えられる演奏を志すことは、いつの世も変化することなく継続していくべきである。そのような学生を育成することを目指し、将来有望な音楽家や教育家、また社会人として社会に貢献できる人材を送り出していきたい。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽	**氏　名**	加納　悦子
職　位	教授	**作成日**	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部
　専門実技（声楽）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
　声楽特別演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
　ドイツ語ディクションⅢ、Ⅳ
　アンサンブル（歌曲・オラトリオ）演習Ⅰ、Ⅱ
　歌曲作品研究A
大学院
　声楽演習Ⅰ、Ⅱ
　声楽領域研究Ⅲ、Ⅳ
　オペラレパートリー研究Ⅰ、Ⅱ
　原典購読

初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
　オフィスアワー

高校生への教育
　受験準備講習会
　オープンキャンパス
　声楽ワークショップ

２　教育の理念

学生の音楽の才能を大学教育により開花させると同時に、卒業後の進路においても、大学での学びが広く社会に活かされること。

３　教育の方針・方法

学生の向学心と自主的な学びのサポートをする。
自身の音楽家としての経験が教育に反映されるように工夫する。

４　改善・努力

身体を使う表現科目のために、学生が自分の身体機能や完成についてどのような認識を持っているのかを理解しようと常に心がけている。
若者にありがちな「気持ちの揺らぎ」に対しても、プライバシーに配慮しながら、学びに関係している部分は細やかな配慮で働きかけをしたい。

５　評価・成果

大学学部の4年間の学修で、学生は音楽芸術に関する知識と経験を多く積んでいると確信している。また大学院では2年間でより専門的に深く専門領域を学ぶことで修了後の職業選択や音楽活動に役立っていると感じている。

６　目標

留学を希望している学生が、その夢を叶えられるように的確に導いていきたい。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽運営会	氏　名	久保田　真澄
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：
専門実技（声楽）Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ.Ⅳ.Ⅴ.Ⅵ.Ⅶ.Ⅷ
アンサンブル特別演習（歌曲・オラトリオ）Ⅰ.Ⅱ

大学院　修士：
歌曲研究（伊）AⅠ.AⅡ.BⅠ.BⅡ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
オフィスアワー等

高校生への教育
受験準備講習会

その他
ディプロマコース
外国人特別研究生

２　教育の理念

・本学の基本理念である「自由、自主、自律の精神」を踏まえ、良識ある音楽家、教育者を育成する事を目的とし、日本及び世界の文化の発展に寄与する人物を育てる。
・それぞれの学生を理解し、声楽の技術の習得に留まらず、作品の背景、詩の意味を深く理解し、楽曲をより深く理解し演奏できる力を養わせる。

３　教育の方針・方法

・音楽の様式、詩の解釈を考えさせて、学生本人の表現したい事を気づかせ、習得した技術を使い演者それぞれが持つ独自の世界を作るべく導く。そのために、学生の意見、考えを聞き、理解する事に努める。
・レッスンにおけるフィードバックを大切にする。

４　改善・努力

・レッスン、授業に対して自習の時間が取れていないと感じている学生が多い。これについては大学のカリキュラムの改善が必要であろう。現場の意見を全体で共有する様に努める。

５　評価・成果

・レッスン、授業についての自習時間が十分でないという学生の自己評価以外は、満足だという意見を得ている。1年生から学年が進むにつれ、レッスンの中で自分の考え、意見をしっかり口に出し説明できる様になっている。
今後も個人の音楽性、感受性を取り入れた演奏をさせていきたいと考える。

６　目標

大半の学生はしっかりと勉強し、自分の課題にきちんと向き合っている。自分の感じている学生の努力に対し、肯定的な言葉を意識して掛けることにより、学生自身が自己を認めていける環境を作る。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽専修運営会	氏　名	黒田　博
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部　　：専門実技(声楽)Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ,Ⅶ,Ⅷ
　　アンサンブル(歌曲・オラトリオ）演習Ⅰ,Ⅱ
大学院 修士：声楽演習Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ
　　オペラ研究（レパートリー研究）Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ
大学院 博士：声楽領域研究Ⅲ,Ⅳ

初年次教育・専門課程開始時教育
基礎ゼミⅠ

相談
オフィスアワー

高校生への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン

２　教育の理念

・本学の基本理念である『自由、自主、自律の精神』を踏まえ、良識ある人を育てる。
・先人が築いてきた崇高な精神に基づいた芸術を継承していく。
・美しいものを美しいと感じ取れる感受性を大切にし、喜怒哀楽の感情を音楽、声楽を通して自己表現する方法を学生達とともに探る。

３　教育の方針・方法

・それぞれの学生の個性、特性を尊重し、問題解決にあたる。
・専門実技においては基礎をしっかりと固めるとともに、個々の学生の問題点を認識し、その克服に必要な方法は何かを考え、達成可能な目標を提示し、その結果をフィードバックする。
・学生間のコミュニケーションを大切にし、アンサンブルなどを通して演奏能力や音楽表現の幅を拡げ、高めていけるようにする。

４　改善・努力
・生まれ持って声を出すという能力を身につけながら、精神の成長とともに社会性や羞恥心などによって、その能力は衰退していく場合が多い。学生の心を解放できるように心がけ、身体を使って声を発するという能力の再生を心がける。 ・声楽の練習時間以外にも学ぶことが身の回りには溢れているということを学生に認識させる。学生が基本的なテクニックを会得できるように、根気強く自身でできる練習方法を伝えるように心がける。 ・授業アンケートの結果は分析し、次年度の授業に活用している。
５　評価・成果
概ね満足しているとの授業アンケートの結果が寄せられている。
６　目標
個々の学生が少しでも自己表現の手段として音楽を活用し、携えることができるように、単なる技術の優越に惑わされることなく、たとえ音楽とは関係ない進路に進んだとしても、音楽芸術を友として生きていけるよう、適切な助言を行うこと。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽専修運営会	氏　名	長島 剛子
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学　部：専門実技(声楽)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ、ドイツ語ディクションⅠⅡ、
　　歌曲演習ⅠⅡ、声楽特別演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
大学院：声楽演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、テーマ別演習AⅠ、AⅡ、BⅠ、BⅡ、
　　歌曲研究（独語）AⅠ、AⅡ、BⅠ、BⅡ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミ　Ⅰ、Ⅱ」

相談
オフィスアワー、等

高校生への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン、出張レッスン等

２　教育の理念

・本学の基本的理念である『自由、自主、自律の精神』を踏まえ良識ある人を育成する。
・声楽を通して自己を表現することを学び、音楽家、教育家に留まらず、幅広い分野で活躍できる人材を育てる。

３教育の方針・方法

・学生が歌う喜びを体得し自ら高いモチベーションを持って学び続けることが出来るような環境を整えることが私の使命だと考えている。同時に学生の人間性の涵養にも心を配り、魅力溢れる人間として将来芸術文化を担う立場に立って欲しいと願い指導を続けている。
・声楽は自分の体が楽器であり、その人に一番合った無理のない発声法の修得が肝要である。在学中に発声の基礎を造り各自が方向性を見つけ、卒業後自分で更に研鑽を深めていけるような土台作りを目指している。そのために1年次はイタリア歌曲から始め、能力、習熟度等に応じて、オペラアリア、歌曲等、各自に適切な課題を与える事を心がけている。
・自身の研究テーマである独歌曲は在学中に必ず全員が学ぶようにし、その際にただ歌わせるだけではなく詩の内容、詩の書かれた背景、詩人等について関心を持たせ、言葉と音楽の関係を追究させている。またピアノパートの重要性にも目を向けさせ、ピアニストと共に作品を仕上げていく過程を大切にさせている。

4　改善・努力

・コロナ禍後、外国人留学生を含め多様な学生が増えてきたように感じているが、それに応えるべく、個々の学生に合わせた丁寧な指導を心掛けた。
・授業アンケートの結果を分析し、次年度の授業・レッスンの改善に役立てている。

5　評価・成果

・授業アンケートでは、概ね高い評価を得ることが出来た。
・クラスの学生のうち、4名が歌曲ソリストコースに在籍していたが、皆立派な成績で修了することが出来た。またそのうち３名が大学院修士課程に進学し、それぞれ更なる成長が期待されている。
・「テーマ別演習ＡⅡ／ＢⅡ」の自由記述に「今まで触れる機会のなかった、近現代の作曲家の歌曲を経験することが出来、非常に勉強になった。また、先生から様々な体験談や知識を聴くことができてとても良かった。」とのコメントを頂くことが出来た。私のライフワークであるドイツ近現代歌曲の魅力を、若い世代の学生たちに広めるべく行っているこの授業の目的が少し浸透してきているように感じ、更に後２年頑張っていきたいという思いを強くした。

6　目標

・大学での学びが、卒業・修了後様々な道に進む学生たちの心豊かな人生を歩んでいく糧となることを信じ、指導を続けていきたい。

7　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽専修運営会	氏　名	福井　敬
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：
専門実技(声楽)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
特別レッスンⅠ、Ⅱ
オペラ特別演習Ⅲ、Ⅳ
声楽特別演習Ⅰ、Ⅱ

大学院：
声楽演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
オペラ研究(レパートリー研究)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
オフィスアワー等

高校生への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン等

２　教育の理念

・音楽を通して、人々の心を豊かにし、社会に貢献出来る資質を備えた人を育てる。
・学部では、自分の専攻を通して、演奏するための専門的な技術と知識、豊かな音楽性を身に付ける。
・大学院では、より高度で専門的な音楽の在り方を学び、音楽を通して、社会に貢献していける人材を育てる。
・高校生には、先ず第一に音楽の楽しさを感じてもらえるようにし、自身の身体を使って声や音楽を生み出す面白さを体感してもらう。

３教育の方針・方法

・学生の個性や特性に合わせた学びへのアプローチを常に心掛ける。
・学生が受け身にならぬよう、自主的な学びを促して行き、発見や習得することの喜びを感じられるように努める。

４　改善・努力
・常に自分を見つめる習慣をつけ、周りからのアドバイスに耳を傾けて、より良い方向性を見出して行けるよう、心掛ける。
５　評価・成果
・授業アンケートでは、概ね良い評価である。
６　目標
世の中の状況がどのような形であっても、音楽は無くならないと信じている。人の心を豊かにする演奏の尊さを伝えて行きたい。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽	氏　名	本島　阿佐子
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：
専門実技(声楽)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
ミュージカル演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
ドイツ歌曲演習　Ⅰ、Ⅱ
ドイツ語ディクションⅢ、Ⅳ

大学院：
重唱研究Ⅰ、Ⅱ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅢ、Ⅳ」

相談
オフィスアワー等

高校生への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン、出張レッスン等

２　教育の理念

・本学の基本理念である『自由、自主、自律の精神』を踏まえ良識ある人を育てる。
・演奏の基礎を身に付けるとともに、楽曲解釈など演奏を深めるための学び方を学ぶ。
・大学院生は、音楽を深める演奏を磨くとともに、自らの才能を探し出し、社会に貢献できる柔軟な力を育てる。
・高校生への教育は、入学前に必要とする声楽の基礎を重視した指導を心がける。

３　教育の方針・方法

・学生を尊重する。
・レッスンにおいて学生とのコミュニケーションを大切にする。
・個々の学生の人格を鑑みてその成長を促すように短期、中期、長期に渡る目標を学生と共有し、アドバイスを与える。
・ミュージカル演習授業においては、舞台作りに必要な〈協働、協調〉を指導し、学生同志がお互いを尊重し高め合う精神を養うことを学ぶような環境づくりを心がける。
・学生それぞれの可能性を見つけ、引き出せるようなモチベーション作り、ポジティブな言葉掛けを心がける。

４　改善・努力

・まず身体という楽器、そして感情を知ることが基本であるが、自分を受け入れられずコンプレックスやうまく歌えなくて悩む学生も少なくない。学生一人一人の人格を受け入れ、彼らが受け入れられている、なんでも教員に話せる安心できる環境作りを目指している。
・自らが常に新しい情報や技術を模索、学習して進化し続け、学生に常により良い指導を提供できるように努力している。

５　評価・成果

・学生自身が俯瞰して今の自分を評価できるように導く。次になりたい自分の目標を立てること、その目標のために今やらねばならないゴールを設定する。
・学生の小さな成長の１歩を見過ごさないで評価する。学生自身で自己評価もさせる。
・成果発表は前期、後期の実技試験とホールでの発表会で行う。

６　目標

学生たちは可能性の塊である。まだ見ぬ可能性の芽をいかに探して引き出せるか意識して指導したい。声楽（音楽）を通して人格を成長させ、豊かな心、他人を思いやる優しい心を持つ人間に育って欲しいと願う。そのためにも学生ひとりひとりを受け入れ、愛情を持って音楽だけでなく様々なことを共有し彼女たちの良いところを伸ばして行きたいと思う。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽専修	氏　名	山下　浩司
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：
専門実技(声楽)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
ドイツ語ディクションⅠ、Ⅱ
声楽実技AⅠ、AⅡ
オペラ演習Ⅰ、Ⅱ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
オフィスアワー等

高校生への教育
夏期・冬期受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン、声楽ワークショップ、出張レッスン等

２　教育の理念

・本学の基本的理念である「自由、自主、自律の精神」を踏まえ、常に広い視野を持ち良識的に考えることができる学生を育てる。
・音楽を通し、本音で相対できる信頼関係を築く。
・それぞれの個性や能力に合った指導を心がける。

３　教育の方針・方法

・高校生以下には、音楽に関わることへの喜びを中心に、基礎的な知識、練習方法を伝える。
・本学学生には国立音楽大学の環境の良さを生かし、のびのびとした生活、勉強ができるように見守る。個々の学生に適応した練習方法、課題を提案しつつ、自ら課題を見つけられるよう導きたい。年に一度、学外のホールでクラス発表会を行う。
・大学院生には、より深く本質を探ることができるような課題や方法を伝える。

４　改善・努力

いかに予習・復習が大切なことなのかを伝えていく必要がある。 学生に現場の現状をフィードバックできるよう、自身が多くの舞台に立ち研鑽を継続する。

５　評価・成果
これまで通り学生が能動的に研究、練習ができるような提案を続けるようにしたい。
６　目標
音楽を通して他人に対する思いやり、細かいことに疑問を持つ目を持てるような助言をしていきたい。 直前のハードルを越えながらも、10年後に自分がどんな場所に居られたら幸せか、を考えられるような教育を目指している。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽専修運営会	氏　名	澤畑　恵美
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：
専門実技(声楽)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
声楽特別演習(オペラソリスト・歌曲ソリスト)Ⅴ、Ⅵ
オペラ特別演習　Ⅰ、Ⅱ

大学院：
オペラ研究(レパートリー研究)　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
オフィスアワー等

高校生への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン、出張レッスン等

２　教育の理念

・本学の基本理念である『自由、自主、自律の精神』を踏まえ良識ある人を育てる。
・学部生は、演奏の基礎を身に付けるとともに、作品の背景を自ら学び演奏に生かそうとする姿勢を養う。
・大学院生は、作品の時代背景やより良い演奏を求めて自らの技術と音楽性を磨き、社会に音楽で貢献できる力を育む。
・高校生への教育は、レッスンを通じて本学での学びを伝え、入学前に必要とする声楽の基礎を重視した指導を心がける。

３　教育の方針・方法

・学生を尊重する。
・レッスンにおいては、学生の問題点について教員からの一方的な提示にならないよう配慮し、学生とのコミュニケーションを大切にする。とりわけ学部生のレッスンでは個々の成長を見極めた的確な課題を与え、基礎課程から専門課程へのより良い導入を心がける。
・オペラ特別演習授業においては、舞台作りに必要な〈協働、協調〉を指導し、学生同志がお互いを尊重し高め合う精神を養うことを心がけている。授業内ではコース学生全員とのコミュニケーションを大切にオペラの楽しさを伝える工夫をする。又大学院オペラ研究

においては、更に高度な学びを目指し、個々の学生の技術と音楽性の向上に役立つ助言を心がけている。
・高校生等については、受講生に応じた適切な助言を行うと共に、質問や不安などに対して丁寧に回答する。

４　改善・努力

・声楽は抽象的なものではなく、身体という具体的なものに基づいている。しかしながら身体を楽器として捉え意識的に声を発することに困惑する学生は少なくない。各々の特徴的な問題点について、何がだめで何が良いかを、出来るだけ明確に助言することが大切である。そのためには学生との信頼関係を築く努力と、何よりも私自身の研鑽が不可欠である。
・レッスン及び授業での学生とのコミュニケーションにおいては、問題点の指摘に偏らず、美点も見出し、学生に自信とやる気を持たせるよう心がけている。
・FDに積極的に参加し、指導法の改善に役立てている。

５　評価・成果

・概ね満足しているとの授業アンケートの結果が寄せられている。
（資料２：授業アンケート結果）
・受講生の多くから、ぜひ本学に入学したいとの気持ちが寄せられている。

６　目標

音楽が人々の心に幸せや潤いを与えられると信じ、音楽の持つ真の力を見つけて、未来ある学生たちと共有したいと思っている。音楽を通して学生たちに寄り添い、先を明るく見る心の豊かさ、剛さを育みたい。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽専修運営会	氏　名	清水　華澄
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：
専門実技（声楽）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
声楽表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ
歌曲演習Ⅰ、Ⅱ
声楽特別演習Ⅴ、Ⅵ

大学院：
声楽演習Ⅲ、Ⅳ
オペラ研究（レパートリー研究）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

高校生への教育
夏期受験準備講習会、冬期受験準備講習会、進学ガイダンス

相談
オフィスアワー

２　教育の理念

学生それぞれが喜びをもって音楽を学び、追求し、その経験を基礎とした『自由・自主・自律』の精神のある人を育てる。

３　教育の方針・方法

『声楽』は唯一「言葉」を司る楽器であるため、音と言葉から作曲家の意思を読み取ってイメージをし、それを自分の声に乗せて「表現」をすることを目標としたい。

４　改善・努力

「表現」をするためには「技術」も必要であるため、身体への意識を高めさせたい。「発声」と「発音」と「表現」を繋げることが重要であると考えるので、学生それぞれの学習スピードや成長速度を考慮し、丁寧に発声と発音から指導をしたい。言語学習の大切さも伝えたい。

５　評価・成果

授業にしても、レッスンにしても、更に興味を持ってもらえるような工夫をすべきである、と感じている。新たなアプローチを模索したい。
今年度は自身の門下でオペラの重唱に取り組み始めた。演技することの楽しさ、面白さ、難しさを実際に経験し、学生達の表情の変化に驚いたので、今年度も何かしらの取り組みをしたい。

６　目標

背伸びをさせて大人になるのではなく、それぞれの楽器に負担のない作品を通して技術力と表現力を高めていきたい。
社会に出ても通用するマナー、語学力を身につけさせたい。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽専修	氏　名	成田　博之
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：専門実技（声楽）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅶ、Ⅷ
　　声楽表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
　　声楽実技AⅠ、AⅡ
　　オペラ演習Ⅰ、Ⅱ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

高校生への教育
　受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン、声楽ワークショップ等

２　教育の理念

・本学の基本的理念である「自由、自主、自律の精神」を踏まえ、音楽を通して社会との関わりの中で、各学生が目指すべき方向性を見出す教育をする

３　教育の方針・方法

・様々な環境の中で育ち、音楽を学ぶ意欲に満ち本学に集まった学生たち各々の意思を尊重し、より個人が成長を自覚出来るよう指導する。
・レッスンを通し、日本を越えて世界を視野に、音楽に様々な価値観が存在することを認識させる。
・音楽において、人間、社会、地域、歴史など、様々な関係が結びついて作曲、演奏されていることを学ぶ。
・以上を踏まえ、音楽と人々の繋がりの大切さを学ぶ。
・各学生が何故、どの様に、誰の為に演奏するのかを自問させ、音楽と関わることの喜びを感じられるように導く。
・学生とのコミュニケーションを大切にし、信頼関係を築いた上で以上のような内容をレッスンにおいて導入することにより、学生がより受け入れやすい環境を作る。

４　改善・努力

学年（年齢）により日常の生活意識が異なることを前提に、各々を注意深く観察する必要がある。表情や言動の変化に注意し、その変化に適した対応が必要となる。それにより学習に対する意欲を向上させ、より学びたいという意識につなげられるようにレッスンにおいて導く。

５　評価・成果

（学生それぞれに才能の差があることは認識されてはいるが、その才能のレベルに精神が追従しているかは疑問である）という新しい問題に直面する。歌唱能力は学年トップクラスの技術を有しているので、より将来を見据えての指導をするも、その課題に挑む精神力が弱く、卒業後の進路として舞台表現者を目指す希望を諦めざるを得ない学生がいた。残念な展開となったが、1年を通しレッスンを行っていく中で、その学生の内に存在する素を見抜けなかったことに非常に後悔させられる。より学生に対する対応の繊細さが求められている。

６　目標

・歌唱やオペラの演技の指導を通して経験したスキルは、将来の専門分野において生かされる基盤になること。
・レッスンにおいてのコミュニケーションによって、精神的な成長を導くこと。
・音楽を通して各分野（異文化）との哲学や思想を理解、共有ができ、共感し、協力できる柔軟なセンスを育むこと。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽専修	氏　名	平井　香織
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

1　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：専門実技(声楽)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
大学院：オペラ研究(レパートリー研究)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
オフィスアワー、等

高校生への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン等

2　教育の理念

・本学の基本理念である『自由、自主、自律の精神』を踏まえ良識ある人を育てる。
・学部生は演奏の基本を身に付けるとともに、楽曲に関する興味を深め、自ら学びを生かせる姿勢を養う。
・大学院生はより深い作品への探究心と、自らの音楽性と技術の向上を目指し、コミュニケーション能力も含めて社会に貢献できる力を育む。

3　教育の方針・方法

・基礎課程においては自分という楽器を知り、無理のない発声や丁寧な楽譜の読み方ができるよう導く。詩を読み込み、そこに書かれた感情や情景などを表現するための感性を育てる。
・専門課程へ入る頃には自らの課題や興味に即した楽曲を選び、自主的にレパートリーを広げてより多くの楽曲に接することができるよう心掛ける。

4　改善・努力

・レッスンに於いては、自身の声の変化や表現の仕方などを実感し確認できるよう、教員からの一方通行にならず絶えずコミュニケーションを図り自らの言葉で意見や感想を述べられるよう心掛けている。
・教員もアップデートが必要である。呼吸に関するセミナーや公開レッスンなどに積極的に参加し自らの研鑽を積み、それをレッスンで還元している。

５　評価・成果

・授業アンケートを見ると概ね「満足している」等の回答が寄せられており安堵している。ただ「1週間あたりの予習・復習時間」をあまり取れなかった学生がいるようだ。アルバイトをしている学生も少なくないので、そういった事で時間が作れないのか本人のヤル気の問題なのか。慎重に様子を見ていかねばならないであろう。
・今年度も受験講習会やオープンキャンパスで担当した高校生から合格後に門下希望の連絡を多数受けている。楽しく且つ集中したレッスンを行えば受験・合格・入学に確実につながることを感じている。

６　目標

音楽を学ぶことをきっかけに、人として大きく成長していって欲しい。
単なる技術の向上だけが目的なのではなく、人と接することの難しさや喜びを肌で感じ、仲間たちと切磋琢磨して一生をかけて音楽に触れていけるよう導いていくことを常に心掛けている。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽	氏　名	松原　有奈
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
「専門実技（声楽）Ⅰ～Ⅷ」「演奏実習（声楽）」
「声楽表現Ⅰ～Ⅵ」「声楽実技ⅢⅣ」
「オペラ演習ⅠⅡ」「声楽特別演習ⅠⅡ」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談

高校生への教育

２　教育の理念

音楽の学びは、生きることに繋がります。
人生が豊かなものになるよう、自分自身の経験を伝えて参ります。

３　教育の方針・方法

先人の残した芸術としての音楽に理解を深め、質の高い演奏をするために一人一人と向き合ってレッスンすることを心がけます。
教育者を志す学生に対しては、より広い知識を共有し、指導の現場に立つ前の準備を行います。

４　改善・努力

クラシック音楽を演奏したり、聴いたりする機会のなかった学生に、まずは演奏することの喜びを伝えることから始めます。
現代の音楽の原点となるクラシックの魅力を、ゆっくりと分かりやすく伝えるよう努めます。

５　評価・成果

ひとりとして同じではない学生に、それぞれ向き合うことで、良好なコミュニケーションが出来ています。レッスンや授業を通して、音楽的なレベルの向上だけでなく、人としての成長を感じています。

６　目標
音楽が、幸せな人生を歩む助けになることを実感できるように、情緒豊かな心を育んでいきたいと思っています。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	声楽専修運営会	氏　名	望月　哲也
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：専門実技(声楽)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
　　声楽表現Ⅴ、Ⅵ
　　声楽特別演習Ⅰ、Ⅱ

大学院：声楽演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
　　オペラ特別演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
オフィスアワー等

高校生への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン、出張授業等

２　教育の理念

・学部生に対しては、演奏するために必要な基礎的な知識、発声の方法を指導し、作品の内容、背景を自主的に学び、演奏に生かしていく力をつけさせる。
・大学院生に対しては、より多角的に作品と向き合えるようテーマを考えさせ、積極的に取り組む力を養い、最終試験に向けての歌唱技術、また研究発表に備えるよう指導する。
・高校生に対しては、まず無理をしないように自分の楽器(声)を大切に扱うことを指導する。そしてその都度喉の状態・負荷を確認しながら入学前に必要な技術を身につける。

３　教育の方針・方法

・レッスンについては、コミュニケーションを重視する。教員自身の考えを押し付けるのではなく、対話をしながら最良の道を目指すようにする。それぞれの声に合った選曲を行い、レパートリーの拡充を図る。
・オペラの授業では、楽譜からの情報を読み取る力が大事だという事を伝えていく。
また、オペラというものは多くの人との関わりが重要になるので、やはり対話をすることを大事にする。

４　改善・努力

・基本的には考えながら指導する事は出来たと思うが、例えば譜読みが苦手な学生にはより丁寧に接していかなければいけない、と考える。
・オフィスアワーに関しては、決まった学生の利用に留まり、結果その学生は12月から休学する結果となった。
自分としては、レッスンの中などで学生のメンタル面などについても、注視していきたい。

５　評価・成果

・レッスンに関して概ね満足している印象を持っている。
・来年度は、専攻3名、教育と幼児教育の学生3名の計6名の学部新入生と外部からの大学院入学生、さらに博士課程の学生も1人入ってくるので、より一層気を引き締めて取り組もう、と考える。

６　目標

多くの学生が「国立音楽大学に入学して良かった！」と思えるような環境作りを、レッスンだけでなく、いろんな場面で学生と関われるよう努めたい。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	鍵盤楽器専修	氏　名	梅本　実
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：「専門実技(ピアノ)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ」
　　「特別レッスンⅠ、Ⅱ」

大学院：「器楽(鍵盤楽器)演習Ⅰ、Ⅱ」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

高校生等への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン等

２　教育の理念

・本学の基本的理念である「自由、自主、自律の精神」を踏まえ、自ら学び成長出来る人を育成する。
・ピアノを通して音楽を総合的に学び、将来音楽家、教育家のみならず、日本や世界の幅広い分野で社会に貢献できる人材を育成する。

３　教育の方針・方法

・音楽全般に高い関心を持ち、自ら学修し、向上する意欲を持たせるような指導を行う。
・ピアノにおいて様々な楽曲を演奏するためには基本となるテクニックの修得が肝要である。その際にただ指が回り、正確に演奏するということだけではなく、作品に内在するメッセージの再現を可能とするような演奏法の基礎（タッチ、手指の鍛錬、脱力、体の使い方、ペダリング等）を是非身に付けさせたいと考え指導している。
・アンサンブルにおいては、自身の研究テーマである独歌曲を中心に指導しているが、その際にただ演奏するだけではなく詩の内容、詩の書かれた背景、詩人等について関心を持たせ、言葉と音楽の関係を思索させるよう努めている。またアンサンブルの重要性に目を向けさせ、相手の声に良く耳を傾け、歌い手と共に作品を仕上げていく過程を大切にさせている。

４　改善・努力

年々多様化する学生を迎え、その指導のやり方は一様では上手くいかないことを痛感している。各自の進度、能力に合わせて、常により効果的なやり方を模索している。また授業アンケートの結果を分析し、次年度の授業・レッスンの方法に役立てている。

５　評価・成果

2024年度後期「専門実技（ピアノ）及び特別レッスン」の授業アンケートでは、受講者13名中7名からしか回答を得られなかったが、結果は良好であった。
項目2，5，6，7，9，12，15で満点の5.00、それ以外の項目でも4.86か 4.71を得ることが出来た。これは昨年よりも高い数字であり、このレッスンが学生たちからある程度高い評価をされたことについて安堵している。

６　目標

卒業及び修了後、音楽を職業に選ばなくとも、自分の側に音楽がある人生を歩んでいけるよう、在学中に音楽の素晴らしさを少しでも多く体験させたい。またそれと共に一つの事に専心する尊さを教えたい。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	鍵盤楽器専修	氏　名	江澤　聖子
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：「専門実技（ピアノ）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ」
「鍵盤楽器基礎Ⅰ、Ⅱ」
「ピアノ特別演習Ⅲ、Ⅳ」

大学院：「器楽（鍵盤楽器）演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」
「ピアノ協奏曲研究Ⅰ、Ⅱ」
「器楽領域研究Ⅰ、Ⅱ」
「研究指導Ⅴ、Ⅵ」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ」

高校生への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン、出張授業など

２　教育の理念

・本学の基本的理念である「自由、自主、自律の精神」を持って良識のある音楽家、教育家を目指す人を育成する。
・常に自己を高めていく努力を重ねることを惜しまない向上心を育み、広く社会に貢献しようとする意欲のある学生を育てる。
・個々の学生一人一人と誠実に向き合い、それぞれの考えを尊重する。彼らに寄り添い、支えていく中で、共に成長し、発展していくことのできる細やかな教育を心がける。

３　教育の方針・方法

個人レッスンにおいては、演奏技術と表現力の向上を目指して、目的を見失うことなく鍛錬を続けていくことの大切さを伝える。個々の学生の実力に合った指導法を模索し、その都度達成できる目標を掲げて、次回へのステップアップに繋げていく。
各学生の長所を自覚させて、それを自分の力で伸ばしていけるように促す。
クラス授業においては、個々の学生の性格や意欲の表出の仕方をよく見極め、全員に目標を持たせ、その達成感を確実に実感できるように、公平な指導の実践に心を配っていく。

４　改善・努力

小さな目標から大きな目標まで、学生自身が自ら可能性を広げていきながら、能動的に様々な問題について考え、成果を上げていけるような指導を推進していきたい。
その為に、教員側も個々の学生の能力と個性を的確に把握、理解をし、さまざまな教育的アプローチができるよう、常に柔軟な思考を意識しながら自己研鑽を心がけていきたい。

５　評価・成果

2024年度後期の「鍵盤楽器基礎II」の授業アンケート（資料２）では、
項目11「授業（レッスン）のための１週間あたりの予習・復習時間は十分に行った」以外の項目1〜10、12〜15の全てにおいて5.00の最高評価であった。
これらの評価からは、学生の充足感と授業運営の方向性の安定を実感することができた。
教員側は毎年同じ内容を練り直しながら授業を展開していくが、学生の方は毎年新しい顔ぶれでクラスの雰囲気も大きく変化していくことにより、教員には常に新鮮な取り組み方が問われている。
授業では一層豊かで意味のある学びを提供することと、学生側もそれを受け身の姿勢だけで漠然と習得するのではなく、より鋭く本質を捉えながら自身の力でその学びを深化させていくことができるよう、一人一人に対して予習、復習の大切さと、充分な自習への意識を持たせることへの教員の努力と工夫が不可欠であると感じている。

６　目標

４年間での大学での学びで得られた成果と共に、社会に出た時に音楽の持つ幅広い可能性とその素晴らしさを伝えていけるよう、教員も常日頃から視野を広く持ちながら多角的な提案とサポートをしていくことである。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	鍵盤楽器専修	氏　名	金子　恵
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：「専門実技(ピアノ)Ⅰ、Ⅱ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
「器楽表現(ピアノ)Ⅲ、Ⅳ」
「ピアノコンチェルト演習AB」

大学院：「室内楽演習Ⅰ、Ⅱ」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ」

相談
オフィスアワー等

高校生への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン、出張レッスン、附属高校選択上級レッスン等

２　教育の理念

・本学の基本理念である「自由・自主・自律の精神」を踏まえ良識ある人を育てる。
・鍵盤楽器の演奏法の基礎を身に付けるとともに、作品を理解し豊かな表現ができるよう導いていく。
・コミュニケーション能力を育成し社会に貢献できる人を育てる。

３　教育の方針・方法

ピアノのレッスンでは、学生の個性を尊重し長所を生かしていけるような指導を心掛ける。ピアノは個人で演奏することが多いため、孤立してしまわないようにアンサンブルを経験することを常に勧めており、実践できる場を設けて実際に演奏できる機会を作っている。ピアノコンチェルトやアンサンブルの授業では、学生同士のコミュニケーションを大切にし、意思疎通を積極的にできるよう促すと共に皆で音楽を共有することの喜びを感じられるように工夫する。

４　改善・努力

学生個々のレベルに応じた適切な指導が必要である事を常に意識し、各々の学生の実力向上を目指して根気よく指導できるように努力をする。前向きなモチベーションを日々持てるように、レッスンや授業を通して話し合いながら様々な問題を改善できるよう、学生に寄り添う事を心掛ける。

５　評価・成果

アンケートの結果では、概ね満足しているという回答であったが、学生の授業に対する準備不足、との回答が目立っていた。また大学院のアンサンブル演習では殆どの学生が概ね満足という回答に対して、1人のみ不満足であったとの結果が目立っていた。アンサンブルに於いては人間関係も問題になってくることから解明が難しいが、良い環境作りができるよう改善していきたい。アンサンブルの同じ授業でも毎週の授業が楽しみであり、アンサンブルを通して人脈が広がって充実していた、という評価もあった。学生の自律を目指し自主的に研究する力を養っていきたい。

６　目標

学生が卒業後、社会に出て仕事をするようになった時に、信頼される人間性と仕事をこなしていける実力を持ち合わせた人材となれるよう、一人一人に真摯に向き合って熱意を持って指導できるよう努める。また自分自身が社会貢献に対して努力を惜しまず、更に研究を進めていくよう努力をする。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	鍵盤楽器専修	氏　名	河原　忠之
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目
学部：
「専門実技（ピアノ）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ」
「器楽表現（ピアノ）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅶ、Ⅷ」
「レパートリー研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
「歌曲作品研究 D」
「アンサンブルレッスンⅢ、Ⅳ」
「声楽作品特別研究　Ⅲ、Ⅳ」

大学院：
「声楽系伴奏研究Ⅱ」
「声楽系伴奏研究（歌曲）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
「声楽系伴奏研究（コレペティツィオン）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
「原典講読（鍵盤楽器）Ⅰ、Ⅱ」

初年次教育・専門課程開始時教育：
「基礎ゼミⅠ」

２　教育の理念

・本学の基本的理念である「自由、自主、自律の精神」を踏まえ、社会に貢献できる人間を育てる。
・個性と協調という異なる要素のバランスを心がけ、常に自分を俯瞰できる人間を育てる。

３　教育の方針・方法

・レッスンにおいては、問題点を改善するためには何が必要かを、自分で考えられるように指導し、その結果をフィードバックする。
・効率よく勉強するのではなく、一つ一つに時間をかけて想像力を伸ばすようにする。
・クラス授業では、常にディスカッションする事を視野に入れ、自分がどう感じ、思うかを積極的に文章化するようにする。

４　改善・努力
自分が経験し努力して培った事が、全員の学生に通用しない事が多いが、常に学生の目線に立ち、困難を解決する為の手助けをするようにしている。将来社会に出て、役に立つ指導をする為に、授業アンケートを常に分析し、改善している。学生のアンケートの解答に自分の考えとの誤差が感じられた。無記名のアンケートなので、それに対して反論できる機会がないが、常に学生とコミュニケーションを取っていきたいと思う。
５　評価・成果
自分の専門分野であるアンサンブル系の授業アンケートでは、内容がわかりやすかった、学生に誠実に接していた、などの評価は高い。非常に高度な事をわかりやすく教える為には、自分が舞台に立つ以外はあり得ないと思う。
６　目標
将来、どんな進路に進もうとも、常に音楽を感じる環境に身を置き、音楽を勉強することで得られた全てのものを、将来に活かせる様な経験を学生にさせたい。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	鍵盤楽器専修	氏　名	進藤　郁子
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
「専門実技（ピアノ）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ」
「器楽表現（ピアノ）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ」
「ピアノ実技ＡⅠ、Ⅱ、」
「ピアノ特別演習Ⅲ、Ⅳ」
「鍵盤楽器基礎Ⅲ、Ⅳ」
「ピアノ指導研究Ⅲ、Ⅳ」
「ピアノ教材研究Ⅰ」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談

高校生への教育
附属高校生徒上級レッスン、受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン等

２　教育の理念

・本学の基本理念である「自由、自主、自律の精神」を踏まえ、良識ある人を育てる。
・音楽の素晴らしさのあくなき追求と、演奏する喜びを学生と共に学び続ける。
・学生に誠実に向き合い、個々の能力を引き出し、それぞれの個性が伸びる指導を心がけている。

３　教育の方針・方法

・自ら音楽を感じ考え、豊かな表現ができる学生を育てる。
・レッスンにおいては、学生の問題点を一方的に指示するのではなく、学生自身で自分の現状を把握し、改善法は何かを考えられるよう、常に対話を重視している。
学生の振り返りの一助としてレッスンファイルを活用し、①練習のポイント②改善できた事、改善できなかった事等を学生が記入し、毎週のレッスン時に確認する。
それを基に学生の理解度を考慮し、個々の能力向上を目標に指導を行っている。
・授業においても、こちらからの指示だけではなく、相互に学び合えるよう学生同士のコミュニケーション（意見交換）を常に行っている。

４　改善・努力

・学生に対しての的確な指導は試行錯誤の連続である。学生を誘発するには何が必要か、常に思考し、自己を客観視し、問題解決能力を磨いていく必要がある。
・レッスン指導にも必要な教育学や教育心理学を学ぶ機会が少ないため、同僚間で学び合う場（ラーニング・コミュニティー）の提供に参加している。現在、教師と学生が学び合う協同学習を実験的に行っている。
・自己研鑽が必要不可欠である。

５　評価・成果

2024年度「鍵盤楽器基礎Ⅳ」の授業アンケートでは、
「学生からの質問や相談に対して」（5.00）
「授業の内容・ポイント」（5.00）
「授業に対する教員の熱意・工夫」（5.00）等、概ね良好であった。
通常のレッスンは、教師対学生の個人単位で行われ、他者の演奏を聴く機会はなかなか無い。この授業では学生が相互に演奏を聴き合い、気づいた事を必ずコメントする等、コミュニケーション能力も磨く。他者の意見を聞き、自分を客観視し演奏に反映させる。この協同学習が学生にとって有益だと思われる。
しかし、「授業のための1週間あたりの予習・復習時間は」（4.33）ではこの項目のみ低かった。アンサンブルには個人練習が必要不可欠である。授業内での実体験から、各自が強く自覚できるよう学生への言葉かけを更に工夫していきたい。

６　目標

・作曲家の作品は世界遺産のようなものである。学生にはその素晴らしさを感じると同時に、演奏とは試行錯誤の連続であること、真摯に取り組むこと、追求をあきらめないこと、をより実感できるよう導いていきたい。
・このピアノを学ぶ姿勢は学生が社会に出た後も、必ず役に立つと確信している。
・音楽を学ぶ事により、学生が前向きになり、視野を広げ、心身ともに生き生きすることを目標としている。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	大学	氏　名	濵尾　夕美
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

1　教育の責任

担当科目（資料１）
学部
「専門実技（ピアノ）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ」
「特別レッスンⅤ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ」
「ピアノ特別演習Ⅰ、Ⅱ」
「鍵盤楽器基礎Ⅰ、Ⅱ」
「ピアノ指導研究入門」
「ピアノ指導研究Ⅰ、Ⅱ」
「器楽表現（ピアノ）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ，Ⅶ、Ⅷ」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
オフィスアワー、クラスルーム、メール等による

高校生への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、
ピアノフェスティバルの体験レッスン等

2　教育の理念

・本学の基本的理念である「自由、自主、自律の精神」を踏まえ、良識ある人を育てる。
・音楽の本質を深くとらえ、自ら探究し、それらを完成豊かに表現できる力を養う。
・学生に誠実に向き合い、個性や能力に合った指導を心がける。

3　教育の方針・方法

独自の視点から自由かつ多角的に作品を研究することを促し、理想の音楽表現を共有しながら共に考え、音楽を創り上げていくことを目指している。幅広く音楽に興味を持ち、知識が得られるよう様々な音楽資料や文献を推奨している。
学生とのコミュニケーションを重視し、信頼関係を築きながら円滑な指導ができるように努めている。学生のキャリアデザインを尊重し、主体性を重視した教育を心がけている。レッスンでは、学生の個性や能力に合わせて課題を選び、強みや課題点を自覚して取り組めるように配慮し、伝えている。合わせて具体的な練習方法やメソッド等も提示している。複数の学生によるクラス授業では、アンサンブルや指導などの実習を通して、学生同士のコミュニケーションを促し、気づきや相互理解を深めながらモチベーションが高められるように努めている。

４　改善・努力

音楽の様式を踏まえ、イメージや奏法において、どこに問題点があるかを的確に見極める指導力は、自らの研鑽を積むことによってこそ高めていけるものと信じ、日々努力している。個々の学生には、キャリアデザインを実現するための具体的なアドバイスや励ましを与えている。基礎課程から専門課程へ、または卒業後など人生の様々なスパンでの目標を見据え、主体的な学びへと導いていきたい。クラスによる授業では、学生自身の自己分析や自己評価を第一と考え、耳を傾けている。課題点も直接的な指摘のみに留まらず、問いかけながら共に考え、克服できるように指導している。学生の努力が見られたことに対しては、その姿勢を尊重し、向上できた点を明確に伝え、クラス全体で成果を実感しながら新たな課題へ向えるようにしている。FDの対象である招聘教授の公開レッスンでは、音楽作品の貴重な研究の機会が得られるとともに、実践的な表現法や指導法の学びとなっている。最終的な演奏発表の場として年2回の門下生コンサートを開催しているが、様々な演奏の機会を模索し、学生と相談しながら計画を立て、挑戦させている。日頃から演奏会に行き、生の音楽に触れることを奨励している。

５　評価・成果

・2024年度授業アンケートの実技レッスンでは、15項目中9項目で5.00の高評価を得た。学生は出席良好で意欲的にレッスンに取り組み、教員は学生に対して誠実に接し、適切な課題を与え、熱意・工夫して指導した結果、学生は概ねレッスンに満足し、自身の知識・技術・考え方などの視野が広がったという結果が読み取れる。今後も個々の学生との信頼関係を大切に育み、細やかに配慮しながら主体的な学びへと促していきたい。
・同アンケートの鍵盤基礎ⅠⅡクラス授業では、教員は学生に誠実に接し、質問や相談・提出物に対して適切な対応をした結果、授業の内容を十分に理解し、修得できたと読み取れる。最も低い評価の項目は、学生の予習・復習時間の項目だった。毎回授業で予習・復習課題を伝えていたが、今後は、どのくらい達成すべきかという目標点をより明確に伝えるよう努めていきたい。
・本学に入学できて良かったという学生・大学院生からの感想が多く寄せられた。
・多くの受講生から、ぜひ本学で学びたいとの声が寄せられている。

６　目標

学生達が音楽への熱意を持ち、日々の鍛錬や感動体験を通して豊かな人間的成長を遂げ、社会で自律して力強く人生を歩んでいけるよう導いていくことが、教育の目標である。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	鍵盤楽器専修運営会	氏　名	堀江　志磨
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部
・専門実技（ピアノ）　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
・器楽表現（ピアノ）　Ⅴ、Ⅵ
・鍵盤楽器基礎　Ⅰ、Ⅱ
・ピアノ指導研究　Ⅰ、Ⅱ
大学院
・器楽（鍵盤楽器）演習　Ⅰ、Ⅱ
・ピアノ教育研究　Ⅰ、Ⅱ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
・オフィスアワー

高校生への教育
・受験準備講習会、オープンキャンパス、体験レッスン、進学ガイダンス、授業公開

２　教育の理念

・本学の基本理念である「自由・自主・自律の精神」を踏まえ、良識ある人を育てる。
・音楽を通じて学生本人が己を知り、自らの表現をする喜びを感得できるよう導く。
・それぞれの学生とコミュニケーションをしっかり取り、学生の個性、能力に応じた指導をする。

３　教育の方針・方法

実技レッスンにおいては、学生が自分自身を知り、自らの言葉で考え方策を立て実行できるようにするため、共同研究で扱ったICEモデル（カナダの学習システム。I:Ideas, C:Connections, E:Extensions)のワークシートを利用する。レッスン時に教員がコメントを書き入れ学生にフィードバック、学生はコメントを元に練習し、できたところできないところをシートに書き入れ翌週シートのコピーを提出するという方法を取り、これをルーティーンとする。レッスン時の音による感性のアプローチ、言葉による思考のアプローチ、ワ

ークシート（言語化）による検証のアプローチで、多方向からレッスンを進める。大人数の授業においては、でき得る限り意見の共有を図るよう心がける。

４　改善・努力

ワークシートの活用は、言語化が不得手な学生にとっては大きな負荷がかかるため、適宜相談し継続するか否か様子を見る。継続しない学生については、レッスンの中で丁寧に聞き取りを行う。学生の性格・得手、不得手を観察し、伸ばすところと努力させるところを確認するようにする。特別レッスン、公開レッスンでは講師の「指導法」に焦点を当て、自分なら何をどう指摘するか常に考えながら視聴するように心がける。

５　評価・成果

専門実技では、
項目9『授業レッスンの出席は良好であった」（4.67ポイント）
項目11「レッスンのための1週間あたりの予習、復習時間」（4.67ポイント）
の2項目に5段階評価の3がついた。
このほかの項目では、9項目が5.00ポイント、2項目に4.89ポイント、2項目に4.78ポイントという結果になった。
数値だけを見れば大変良好であるが、有効回答学生数（9/16)を見ればこれを全体的な傾向とすることはできない。
項目9、11については、諸々の環境で心のバランスを崩す学生がおり、その結果が反映されたものと考える。
他、回答学生の結果からは、レッスンに対する教員の姿勢が一定の効果をあげていることが想像できる。来年度に向けてさらに方法を精査するとともに、施設利用についても積極的に考えていきたい。

６　目標

・４年間の音楽大学での学びを通して、学生たちが自ら進む道を決め、その足で立っていけるよう指導していくこと。
・学生本人が自身の可能性を限定せず、広く大きな枠で考えられるよう助言していくこと。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	鍵盤楽器専修	氏　名	有森　直樹
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
　　専門実技Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ
　　器楽表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ

初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談

高校生への教育
ミュージックアトリエを通してのレッスン

２　教育の理念

学生の自主、理念を尊重し自発力を見守る。

３　教育の方針・方法

週一回のレッスンを通して常にフィードバックをし、必要に応じて新しい課題を学生と共に考える。

４　改善・努力

連弾などを通して学生の歌心を引き出しコミュニケーションを図る。

５　評価・成果

アンサンブル能力を引き出し一定の成果が発揮出来たと考える。

６　目標

学生がピアノに更に興味を持ち器楽表現の学生においてはそれぞれの専攻に活かせるようにする。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	鍵盤楽器専修	氏　名	沢田　千秋
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

1　教育の責任

担当科目
学部:「専門実技(ピアノ)Ⅱ、Ⅳ、Ⅷ」
「特別レッスンⅡ」
「器楽表現(ピアノ)Ⅳ、Ⅵ」
「ピアノ教材研究概論」
「ピアノ教育論」
「鍵盤楽器基礎Ⅲ、Ⅳ」
「ピアノ指導研究」
大学院:「ピアノソロ研究ABI、Ⅱ」
「器楽（鍵盤楽器）演習」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談

高校生への教育
「附属高校生上級レッスン」
「進学ガイダンス 体験レッスン」
「オープンキャンパス 体験レッスン」
「夏期講習会」
「冬期受験講習会」

2　教育の理念

・本学の基本的理念である「自由、自主、自律の精神」を踏まえ、良識ある人を育てる。
・音楽を表層的にとらえず、本質の深い理解とさらなる探究につながる教育を目指す。
・個々の学生に誠実に向き合い、よい信頼関係を築き、それぞれの個性や能力に合った指導を心がける。

３　教育の方針・方法

今年度も、授業及びレッスンの両方において、学生自らが自律的に学習する力「音楽的自活力」（2019、沢田）を、学生一人一人の個性に合わせて、気づきを促す仕組みや指導を行うように努めた。どの学生もが、音楽への真摯な取り組みを通して、自己実現を信じて現在を進めるよう、分析しながら学ぶ力を高めるように指導する。教師自身が行っている指導法研究や共同研究にも学生に参加協力してもらい、共に学ぶ姿勢を共有している。（「協同学習」）授業、レッスン共に、積極的な発問や調べ学習、選択する機会を与えるなど、学生の自発的な学習意欲を促す授業運営を常に心がけている。

４　改善・努力

レッスンでは、試演会を数多く（前期２回、後期４回）行い、学生同士が演奏を聴き合い、演奏についてコメントすることで、自らの分析力を高める取り組みを行った。学生に「自ら気づき学ぶ」ことを意識させ、教師は、学生の小さな変化を見逃さずに、それらを取り上げて伸ばすきっかけとすること、学生自身が自分の成長や変化に気づくことができるような機会を大切にすることを意識して各授業を運営した。

５　評価・成果

専門実技（ピアノ）、器楽表現の実技レッスンでは、アンケート結果は全ての項目が概ね５であった。（１のみ、4が1名）しかし、26名中、5名しか回答をしていないことからも、良いと思っている学生のみが回答した可能性がある。試演会を数多く行ったことは、学生達にとって、自信に繋がったようだ。「また来年度も沢山実施してほしい」という声を、多く聞いていることを、心から嬉しく感じている。一方、「ピアノ教育論」のアンケート回答は、受講者13名のうち、5名が回答した。1名が４または３を示しているが、他は概ね５であった。「11.授業のための１週間あたりの予習・復習時間は」という質問に対し、「２」と回答したものが３名あった。授業に前向きに取り組めない学生も中にはいるため、そういった学生にも興味や意欲を持たせる工夫をもっとしなくてはならない。

６　目標

担当している学生達の中には、僅かながらレッスンや学校生活に消極的な学生もいるため、各人の様子に注視しながら、個々が自分の成長に目を向け、前向きに頑張れるように導いていきたい。授業においては、学生達の視野を拡げることができるよう、授業のやり方をさらに工夫していく必要があると考えている。先の見えない現代に生きる学生達にとって、音楽に向き合うことが、「確かなもの」として、彼らの人生を支えていけるように、学生一人一人に届く教育を行っていきたい。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	鍵盤楽器専修	**氏　名**	新納　洋介
職　位	准教授	**作成日**	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
【学部】
専門実技(ピアノ)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
鍵盤楽器基礎Ⅲ、Ⅳ
器楽表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
ピアノ実技AⅠ、AⅡ
作曲家と作品分析Ⅲ、Ⅳ

【大学院】
専門実技Ⅰ、Ⅱ
ピアノ協奏曲研究Ⅰ、Ⅱ

初年次教育・専門課程開始時教育
基礎ゼミⅠ、Ⅱ

相談
オフィスアワー

高校生への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス・芸術祭の体験レッスン、進学ガイダンス

２　教育の理念

・本学の基本的理念である「自由、自主、自律の精神」を踏まえ、良識ある人を育てる。
・学生個々の美的感性、個性を尊重し、国際社会で活躍できる人材を育てる。
・学生一人一人と誠実に向き合い、信頼関係を築き、心身共に豊かな環境での学びを目指す。

３　教育の方針・方法

・学生自身が思い描いている夢やビジョンを実現させるためには、何が一番必要かを常に考えた指導を心がけたい。
・専門実技のレッスンにおいて、演奏技術の習得には妥協せず、基礎から丁寧に指導する。
・魅力的な演奏を目指すべく、個人の長所短所を見極め、個性を伸ばすレッスン計画を組む。
・クラス授業においては、学生同士で音楽に対する意見交換をし、良い人間関係を築きながら、深い考察力を養う。

４　改善・努力

幼少の頃から最新の情報通信技術・人工知能(AI)で溢れた環境で育った学生の価値観を理解し、尊重していきたい。
その一方、効率化が求められる現代社会において、時間のかかるクラシック音楽の習得は相反するものとなっている。学生には、「考える時間」「感じる時間」の大切さを伝え、芸術を極めていってもらえるよう模索する。

５　評価・成果

学生へのアンケートの結果を見る限りでは、専門実技のレッスン、授業共に、学生からの評価は概ね良い結果であった。ただ、アンケートへの回答率が高くないため、このまま来年度も同じで良いとは思っていない。より深い内容にすべく、精進を続けていきたい。

６　目標

本学の基本理念にもある、日本および世界の文化の発展に寄与することができる学生を育てたい。
学生が卒業後(修了後)、本学で学んだことに誇りを持って社会で活躍できるような環境を整えたい。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	鍵盤楽器専修	氏　名	山内　のり子
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

1　教育の責任

担当科目（資料１）
学　部:「専門実技(ピアノ)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ」
「鍵盤楽器基礎Ⅰ、Ⅱ」
「ピアノ指導研究入門」
「ピアノ教材研究Ⅱ」
「器楽表現(ピアノ)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
「ピアノ指導研究Ⅰ、Ⅱ」
大学院:「器楽(鍵盤楽器)演習Ⅲ、Ⅳ」
初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」
高校生への教育
「選択上級レッスン」
「受験準備講習会」
「進学ガイダンス」
「体験レッスン」等

2　教育の理念

・本学の基本理念である「自由、自主、自律の精神」を踏まえて、良識ある人を育てる。
・一人一人が音楽に深く関わりながら、喜びが感じられる時間を得られるよう指導していく。

3　教育の方針・方法

自ら考え実践し、それらを検証し改善していける学生を育てるために、常に問題意識を持って学べるよう問いかけたり、アドバイスをしたりするよう心がけている。アンサンブルのパートナーや、指揮者と奏者などのように、相対する立場としての教師と学生の気持ちに思いを馳せて両者の思考や表現を、音楽において想像力に変えていけるような指導を行うこと。

4　改善・努力

授業以外に人前で演奏する機会が少ない学生に対して、発表会以外に学生同士で聴き合う時間があるのと無いのとでは試験への取り組み方が違うことがある。そうした機会が作れなかった時や本番前になっても暗譜が出来ず仕上がってこない場合に、録音させて自ら聴くだけでなく教員に送るなど、時間の限られた中で、想像力を働かせて練習する環境を促してみた。また、昨今では発表会も積極的に参加する学生と、そうでない学生が両方おり、発表する意義を理解して参加するように働きかける必要も出てきている。

５　評価・成果

専門実技、器楽表現のアンケートでは概ねレッスンに満足という結果だが、試験の結果としては良いばかりでは当然ない。２年生のベートーヴェンのソナタでは楽章毎に仕上げていく過程において細部に時間がかかるため、全楽章を弾き通す際にテンポ感が怪しくなったり、見通しが立ちにくい場合が出てくるなど課題が幾つか見えた。早いうちから全体像を描いて客観的に聴いて演奏するための、より具体的な言葉と模範演奏、また学生同士の切磋琢磨できる機会を多く設けていくことが今更だがより必要であると感じた。

６　目標

学生が試行錯誤しながらも自信を持って音楽活動を続けていけるように教育を行うことが目標である。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	弦管打楽器専修	氏　名	青木　高志
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）

初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談

高校生への教育

２　教育の理念

・本学の基本的理念である「自由. 自主. 自律」の精神を踏まえ、良識のある人を育てる。
・学生の考えを尊重し、自ら考え、自ら学ぶ姿勢を大切にした指導を心がける。
・演奏の基礎を身につけると同時に、自由な表現力を持てるよう指導する。

３　教育の方針・方法

・演奏の技術的向上ばかりを目指すのではなく、「音楽を演奏する喜び」を体感出来るよう指導する。
・学生の音楽的な思考欲求を尊重し、教員からの一方的な指示とならないよう心がける。
・学生とのコミュニケーションを大事にし、学生に寄り添った指導をする。

４　改善・努力

学生にとって何が問題点であるかを適切に見抜き、的確な助言をすることが望まれる。しかしながら、それまでの演奏実績や個性-技量などは各学生においてまちまちであり、学生に合わせた指導が必要とされる。試行錯誤の連続であるが、モチベーションの向上を大事にしつつ、学生と向き合っていきたい。

５　評価・成果

授業アンケートの結果を踏まえつつ、学生の声を大切に反映させ、この先も取り組んでいきたい。

６　目標
音楽に携わる、ということの幸せを感じてもらい、各学生の「本心からの音楽」を奏でてもらいたいと願っています。そして、本学で音楽と向き合った年月が、充実し実りあるものであるよう手助けしていければと考えています。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	弦管打楽器専修	氏　名	井手　詩朗
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部
基礎アンサンブル(Cor)Ⅰ、Ⅱ
オーケストラ・スタディ（木管・金管・打楽器）Ⅲ、Ⅳ
吹奏楽ABCD

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ」

相談

高校生への教育
受験準備講習会、出張模擬授業、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン等

２　教育の理念

本学の基本理念である『自由、自主、自律の精神』を踏まえ、良識のある人を育てる。
演奏の基礎を身につけると共に、楽曲においてはその作品の背景(作曲家や時代等)を自ら学び演奏に生かそうとする姿勢を養う。
とにかく興味を持ち、視野を拡げ、こだわりを持つ。

３　教育の方針・方法

先ずはそれぞれの学生としっかり向き合う。
専門実技においては自分を知ること、自分の状態をいつもチェックするためにウォームアップとメンタルトレーニングをリンクさせ、それぞれの学生に合ったルーティンを作り基礎を作っていく。学生同士のコミュニケーションを大切にし、定期的に発表会を行うことで皆で演奏能力や音楽を高めていけるようにする。
合奏や室内楽においては、自分の演奏のみならず、他のパートにアンテナを張れるようにスコアを読む習慣をつける指導をすること。

４　改善・努力

2020年からのコロナ禍の中で、学生達は録音する事、オンラインでレッスンを受けることを余儀なくされた。しかしこの事で様々な可能性もコロナ前より広がったと考えられる。各オーディションなどでも演奏動画の提出という機会が多くなり、その技術も上がり、繰り返しチェック出来ることで演奏の質も上がってくるという相乗効果も見られる。ソロだけではなくアンサンブルや大きな合奏でも質を上げる努力をしていきたい。

５　評価・成果

概ねアンケートの結果でも満足しているとの結果があるが、自習の時間が足りていないとの自己評価が問題である。
演奏の技術は間違いなく上がってきているので、あれもこれもと詰め込み過ぎないような指導も必要になってくるかと思う。

６　目標

単なる技術の優劣に惑わされることなく、それぞれの楽器の持つ音色と音楽の尊さがしっかりと繋がってそれぞれの学生が自分の道を切り拓き目標に到達できるように取りこぼすことなくそれぞれの学生と向き合っていく。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	管弦打楽器専修	氏　名	井川　明彦
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目
学　部　：専門実技(トランペット) Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
　　基礎アンサンブル（Trp）Ⅰ、Ⅱ
　　管弦楽A.B.C.D
　　弦管打特別演習Ⅰ、Ⅱ
　　室内楽（金管五重奏）A.B.C.D
大学院　：オーケストラA.B.C.D
　　オーケストラ特別演習A.B.C.D.E.F
正規生外：管弦楽特別演習A.B.C.D

初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

高校生への教育
受験準備講習会、出張模擬授業、オープンキャンパス、進路ガイダンス、体験レッスン等

２　教育の理念

『自由、自主、自律の精神』という本学の基本理念をふまえ、自主的な音楽の探求、自由な音楽表現、音楽の自立を目指していく。
また本学の器楽教育の柱であるアンサンブル教育を通して人間同士のコミュニケーション力、指導者になった時に活かせる演奏力のヒントを取得すること、音楽を他角度から俯瞰することにより掘り下げられる能力を培っていく。
何より多様な音楽を勉強することにより豊かな人間性を育てていく。

３　教育の方針・方法

専攻実技では学生それぞれの実力を把握し無理のない範囲での教材の選曲により演奏能力の向上、完成度の高い演奏を目指していく。また基礎練習の重要性を理解させるとともに演奏の失敗も理由を考察することにより次の演奏に活かす力を身につける。演奏技術を高めるとともに楽曲の作曲背景、音楽的内容もしっかりと理解することも怠らぬようにする。
合奏授業ではまず基礎アンサンブルで合奏の基礎、特に呼吸の取り方の重要性、音程・ハーモニーを合わせる能力、周りの音を常に聴く能力を身につける。
室内楽では１、２年の基礎アンサンブルの授業で身につけた能力を金管楽器全体に広げて吹奏楽、管弦楽のセクションとしてのアンサンブルをより緻密なものにしていく。
オーケストラスタディでは木管楽器と打楽器、管弦楽ではさらに弦楽器と範囲を広げたさらに複雑なアンサンブルを勉強していくとともに、私がこれまで体験してきた著名な演奏家、指揮者との演奏活動で得た貴重な経験を若い学生たちに伝えていく。

４　改善・努力

専攻実技、合奏ともに完成度の高い演奏を体験することで得られる充実感、喜びを発表会、定期演奏会などを積極的に利用して聴衆の前で演奏する経験を積んでもらう。
また演奏の全体像を把握しにくい管弦楽では授業の記録をフィードバックし生徒の学習に役立ててもらうようにする。
楽器の編成の特性による演奏機会のばらつきも可能な限り均等にできるように務める。

５　評価・成果

概ね目標は達成されているとの評価であるが練習初回に向けての譜読み、練習（予習）はもっと必要と感じられるのでその重要性を理解させ徹底させるようにする。また学生たちが曲を未消化のまま演奏会に臨んだり授業を終了したりせぬように努力する。

６　目標

楽器の演奏、特に合奏を通じて円滑な社会活動の進め方、コミュニケーションの方法など音楽の勉強に取り組むことで豊かな人間形成を目指す。
大部分の学生は専攻楽器で職を得ることが目標になっていると思われる。その希望を叶えられるようにきめ細かいアドヴァイスや指導ができるようにしたい。
４年間の大学在学中に探求できる音楽、得られる楽器の演奏技術は全てではないが、卒業後もさらに学びが続けられるようにその基礎、道筋をしっかりと見つけてもらえるように指導するようにする。
また指導に携わるようになった生徒にも国立音大の音楽教育が次世代に引き継がれるように、指導者としての視点からアプローチすることも忘れないようにする。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	弦管打楽器専修	氏　名	漆原　啓子
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）

【学部】

専門実技（ヴァイオリン）Ⅲ、Ⅳ、Ⅶ、Ⅷ
上級アンサンブルABCD
弦楽器オーケストラプレイヤー演習Ⅰ、Ⅱ
室内楽ABCD
弦管打特別演習Ⅲ、Ⅳ

【大学院】

器楽（弦管打）演習Ⅲ、Ⅳ
弦管打研究（レパートリー研究）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

初年次教育・専門課程開始時教育

「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

２　教育の理念

・本学の基本理念である「自由、自主、自律の精神」をもって、良識ある音楽家、教育家を育成する。

・音楽の基本的な知識、技能を学び、しっかりとした基礎を形成する。

３　教育の方針・方法

・楽器のスキルアップは、もちろんの事ですが、和声分析、アナリーゼなども出来るように指導していく。

・上級アンサンブルでは、指揮がなくても、演奏者同士で合図を出し合ってアンサンブルを出来るようにする。

４　改善・努力

昨年度は、定期的に発表会を行う計画を立てていましたが、結果的には一年で一回しか出来なかったので、今年度は、もう少し頻繁に発表会を行いたいと思います。

５　評価・成果
上級アンサンブルでは、あまり演奏される機会が少なくても素晴らしい曲を取り上げました。それにより、譜読みの能力が上がったのではないかと思います。 専門実技では、身体の使い方、呼吸法を徹底した結果、すべての生徒の音が格段に良くなりました。
６　目標
ただ単に、演奏技術を上げることだけを努力するのではなく、作曲家に敬意をもって、深く掘り下げられるようになれるよう指導していきたいと思います。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	弦管打楽器専修	氏　名	岸良　開城
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

担当科目（資料1）

専門実技（トロンボーン）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ

管弦楽I、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

管弦楽特別演習I、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

楽器表現（トロンボーン）I、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

基礎アンサンブルI、Ⅱ

吹奏楽A、B、C、D

吹奏楽I、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

オーケストラ・スタディ（木管・金管・打）I、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

２　教育の理念

本学の基礎理念である「自由、自主、自律の精神」を踏まえ、良識ある人を育てる。

一人一人の個性を尊重し、個々の学生に誠実に向き合い、良い信頼関係のもと、それぞれの能力に合った指導を心がける。また、コミュニケーションにおいて、社会に貢献できる人間を育成する。

３　教育の方針・方法

・個性を尊重しつつ、音楽的な能力や技術を伸ばすための総合的なアプローチを行う。

・演奏において、楽曲の音楽的内容や作曲背景等を理解するよう授業を行う。

・定期的に発表会を開き、演奏技術やメンタル面についてフィードバックを行う。

・アンサンブルにおいて、ハーモニーの重要性や視野を広めて演奏できる技術を身につけさせる。

４　改善・努力

授業において取り上げた作品を事前にアナリーゼさせることが重要である。

自分の専攻する楽器以外にも興味を持ってもらえるよう、学内で行われる公開レッスン、国際マスタークラス等の聴講を積極的に促し、表現の幅を広げさせる。

５　評価・成果

アンケートの結果は概ね満足しているとの結果であるが、これからも学生の声を大切にしながら取り組んでいく（資料2）。

６　目標

演奏において、メンタルトレーニングを中心に取り組む。

ストレスを適切に管理し心の状態を保ち自信を持って演奏に取り組めるように指導する。

授業において、事前練習がいかに大切かを指導する。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	管弦打楽器専修	氏　名	幸西　秀彦
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

1　教育の責任

担当科目（資料１）
学部
専門実技（打楽器）Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ,Ⅶ,Ⅷ
基礎アンサンブルⅢ,Ⅳ
上級アンサンブルA,B,C,D
弦菅打特別演習Ⅰ,Ⅱ

大学院
器楽（弦管打）演習Ⅱ
研究指導（演奏系）Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ
器楽領域研究Ⅲ,Ⅳ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅡ」

高校生等への教育
受験準備講習会、出張模擬授業、オープンキャンパス、体験レッスン等

2　教育の理念

本学の基礎理念である『自由、自主、自律の精神』をふまえ、良識のある人を育てる。
演奏の基礎を身に付けると共に、楽曲においてはその作品の背景（作曲家や時代等）を自ら学び演奏に生かす姿勢を養う。
視野を広く持ち、様々な事に興味を持ち、こだわる事を大切にさせる。

3　教育の方針・方法

まずはそれぞれの学生を知る事。
その上で、専門実技においてそれぞれの学生のペースに合った指導方法を構築する。
当然そこにはメンタル的な要素も含まれてくる。
そして学生同志のコミュニケーションを大切にし、定期的な演奏会を行うことで、それぞれの基礎能力を含めた演奏能力や音楽性を高めていけるよう指導する。
合奏やアンサンブルにおいては、自分の演奏だけではなく、他のパートや人々をよく聴き、スコアを読む習慣をつける指導をする。

４　改善・努力

昨今猛威を振るったコロナ。その影響で教育の現場も様変わりした。また、今後様々な感染症の流行の可能性も否めない。今後もその時その時の状況に即した対応が求められていく事も重要であろう。
しかし音楽は同じ現場にいて、同じ時間を過ごす事によって生まれる事が非常に重要であり、そんな現場が数多くあることは否めない。
オンラインでのレッスン等々、時代に即した授業形態が生まれて来たのも事実。
今後は上手くそれらの方式を併用しつつ進めていけたらと考える。
レッスンの場合、その時で終わる音楽を、録画等する事によって後で確認出来る。しっかりと検証が出来る機会を活用していきたい。
それを個人、アンサンブルの質の向上に繋げていけたらと考える。

５　評価・成果

学生のアンケートの結果によると、概ね満足感の得られる回答が多かったように見受けられる。
しかし、個人練習、アンサンブル、合奏等々学生達に時間が十分にあるのか、その点を踏まえた指導が出来たらと考える。
演奏技術だけではなく、決して詰め込みではない音楽教育をしっかり考えたい。

６　目標

確かに音楽家としてのスキルが重要なのは言うまでもない。
しかし、それに伴って楽器の音色の重要さ、音楽性。それらを自分自身でしっかり切り開き、それぞれの目標を達成すべく学生たち達と向き合い学んで行きたいと考える。
そして、人間的にも一社会人として成長出来るように。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	管弦打楽器専修運営会	氏　名	田中　靖人
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
専門実技（サクソフォーン）Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ.Ⅳ.Ⅴ.Ⅵ.Ⅶ.Ⅷ
室内楽（サクソフォーン四重奏）ABCD
吹奏楽Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ.Ⅳ
吹奏楽ABCD

高校生等への教育
受験準備講習会、出張模擬授業、進学ガイダンス、体験レッスン、オープンキャンパス等。

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

２　教育の理念

本学の基本理念である「自由、自主、自律の精神」を踏まえ、良識ある人を育てる。
基礎を大切にし、柔軟で自由な表現力を持てるよう指導する。

３　教育の方針・方法

楽器の技術的向上は大切だが、音楽を表現するための技術であることを体感出来るよう指導する。「音楽を表現する喜び、楽しさ」を一方的な指導ではなく、自主的に考えて行動出来るよう導く。

４　改善・努力

学生の性格、持っている力は様々なので、普段の様子、良いところ、問題点を把握し、良いところはさらに伸びるよう、問題点は改善出来るように学生と向き合っていきたい。

５　評価・成果

授業アンケートの結果は概ね好評であったと思われるが、さらに良い関係となるよう、学生の意見に耳を傾け取り組みたい。

６　目標
音楽は「聴くこと」が大切です。共演者の音をよく聴き、それに対して自分はどんな音で演奏するのかを考えることによってお互いが寄り添い、良いアンサンブルになります。これは人間社会と似ていると思います。音楽を通じていろいろな事に関連付けた柔軟な考えを持てるよう、一緒に勉強したいと思う。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	弦管打楽器専修	氏　名	大和田　智彦
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：
専門実技（クラリネット）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
特別レッスンⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
弦管打特別演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
管弦楽Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
管弦楽特別演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
オーケストラ・スタディⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
基礎アンサンブルⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
上級アンサンブルⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
吹奏楽Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
修士：
器楽（弦管打）演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
オフィスアワー、メール等による

高校生等への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス、進学ガイダンス、体験レッスン等

２　教育の理念

本学の基本的理念 自由、自主、自律の精神を以て良識ある音楽家、教育家を育成し、日本および世界の文化の発展に寄与するという、本学の基本理念に基づき、優れた技術の習得とともに、クラリネット演奏における深い表現力と感性を養うことを目指します。自らの演奏スタイルを確立し、自主的に学習し続ける能力を持った音楽家を育てます。音楽を通じて人と人とのつながりを深める力を養い、社会に貢献する音楽家の育成を目指します。

３　教育の方針・方法

学生が自身の音楽的アイデンティティと創造性を発見し、発展させることを奨励します。様々な音楽スタイルとジャンルに触れ、自由な音楽表現を探求する機会を提供します。
学生が自己の学習目標を設定し、達成するための道筋を自ら考え、実行できるよう支援します。個々の興味や目標に応じた学習プランを一緒に考え、自主的な練習と研究を奨励します。技術的な指導に留まらず、音楽家としての倫理観、社会性、リーダーシップを育成します。音楽を通じて社会に貢献する意識を高め、自律的に活動できる音楽家を目指します。

４　改善・努力

アンケート結果より、概ね評価を受けているとの認識であるが、学生が演奏・音楽を通じて自身の個性と創造性を自由に表現できるような環境を更に強化し、学生生活、及び指導の中で学生が自らの学びの方向性を決定し、自律的に取り組める機会を増やすよう心がけます。楽器の技術向上だけでなく、社会的責任感と倫理観を持った音楽家および教育家の育成に注力します。学生および教員等の交流を促進し、グローバルな視点を持った音楽活動を奨励します。音楽を通じた文化交流の場を可能な限り創出していきたいと思っています。

５　評価・成果

学期末試験やアンサンブル本番での演奏において、技術的な精度（音程、リズム、アーティキュレーション）を評価します。技術的な要求を満たしつつ、音楽的な意図を明確に表現できるかを重要視します。作品の音楽的内容をどの程度理解し、表現できているかを評価します。ダイナミクス、フレージング、テンポの選択など、演奏に深みと感情を加える能力を重視します。各種アンサンブル本番において、他の演奏者との調和、聴き合い、バランスの取り方を評価します。チームとしての一体感を生み出し、作品を際立たせるための協力ができているかがポイントとします。演奏会や試験に対する態度、準備の徹底度、舞台での所作能力も評価の対象とします。

６　目標

継続的な計画と指導を通じて、全学生の演奏レベルを着実に向上させることを目指します。学生たちが互いに支え合い、高いレベルのアンサンブル演奏を実現できるよう、アンサンブルスキルの向上に注力します。学期末試験やアンサンブル本番を通じて、舞台での表現やスキルを身につけ、社会で活躍できる音楽家の育成を目指します。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	弦管打楽器専修	氏　名	髙橋　聖純
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）

学部

「基礎アンサンブル(フルート)Ⅰ、Ⅱ」
「オーケストラ・スタディⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
「管弦楽Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ」
「専門実技(フルート)Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ」
「特別レッスンⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
「弦管打実技Ａ(フルート)Ⅲ、Ⅳ」
「弦管打特別演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」

大学院

「器楽演習Ⅲ、Ⅳ」
「研究指導Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」

初年次教育・専門課程開始時教育

「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

高校生等への教育

受験準備講習会、出張模擬授業、オープンキャンパス等
初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

２　教育の理念

本学の教育理念である「自由、自主、自律の精神」を踏まえ、良識のある人を育てる。
楽器演奏の基礎を磨き、楽曲に取り組むにあたって自力で作品に対する理解を深める能力を身につける。
音楽のみならず様々な経験を重ねることによって、さらなる良い演奏を目指すという、真摯な姿勢を養う。

３　教育の方針・方法

レッスンにおいては、それぞれの学生に適した指導を行なう。学生個人ごとに異なる課題に向き合い、適切な段階を経てよりよい音楽に到達できるよう配慮する。また、学生が自発的に音楽に対して疑問を持ったり、理想を抱いたりできる環境を整え、学生側が受け身になりすぎないよう気を付ける。
オーケストラ等を含む多人数アンサンブルの授業では、複数人で一つの音楽を作る際に必要な素養を深める。

４　改善・努力
学生が抱える課題は多岐にわたり、自身が過去に課題を克服した方法が、必ずしも学生に合うとは限らないため、様々なケースを想定した指導を心がける。自己研鑽を怠らず、常に引き出しを多く持てるよう努力する。 今年度に入って指揮を務める機会もあったため、また新しい視点を持って指導を行う。
５　評価・成果
授業アンケートの結果は概ね良好だが、授業時間が不足しているという回答が多い。履修者人数に対して授業時間が短いアンサンブルなどの授業に関してはより時間効率の良い進行を考えていく必要がある。
６　目標
学生が、単なる技術の優劣や身近な人の成績といったものに惑わされることなく、音楽の素晴らしさを信じて、自分に合った将来を切り開くことができるような、手助けができること。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	ジャズ専修	氏　名	池田 篤
職　位	教授	作成日	2025年6月8日

1　教育の責任

担当科目（資料１）
共通
　ジャズ実技Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
学部
　専門実技（ジャズ・サクソフォーン）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ
　即興演奏Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
　ジャズ・ワークショップⅠ、Ⅱ
　ジャズ・アンサンブルⅤ、Ⅵ
初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」
高校生への教育
　受験準備講習会、オープンキャンパス、公開授業、附属高校特別授業
初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」
相談
　オフィスアワー
高校生への教育
　受験準備講習会、オープンキャンパス、公開授業、附属高校特別授業、出張模擬授業

2　教育の理念

本学の基本理念「自由、自主、自律の精神」に則り、良識ある人間を育成する。
ジャズにおける即興演奏を体得することで、自己の表現のみならずアンサンブルの本質を探究し、そのコミュニケーションに於いて社会に貢献できる人間を育成する。

3　教育の方針・方法

個々の学生に対し、それぞれに合った指導をしていくことを心掛けている。決して毎年の台本通りに進むことなくジャズという音楽のように即興的に、その日その時に最善の指導する事を心掛けている。

4　改善・努力

2022年度からは新しくジャズ・コースが新設された。ジャズ専修の学生達と交流を深め、ともに切磋琢磨出来る環境づくりに力を注いでいる。3年目の今年度は確実にその成果が現れてきたと感じる。

５　評価・成果

授業やレッスンに対する評価は、アンケート結果よりもむしろ、学生との直接の対話によって得ている。
出来るだけ学生達に寄り添い、授業以外の大学生活の事などについても会話し、素直な意見を伝えてもらえるようにしている。
一定の成果はあると思われる。

６　目標

学生自身が自分で自己の課題を考えられ力が付けられるようにサポートしていけることを目標としている。
ジャズ・ミュージシャンの多くは個人事業主であり、卒業後独り立ちをした時に、その力が大きな財産となるからである。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	ジャズ専修	**氏　名**	塩谷　哲
職　位	准教授	**作成日**	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
共通
「ジャズ実技Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」

学部
「専門実技（ジャズ・ピアノ）Ⅰ、Ⅱ、Ⅶ、Ⅷ」
「ジャズ伴奏法Ⅰ、Ⅱ」
「録音・舞台表現 A B」
「作編曲 A B」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
オフィスアワー、メール等による

高校生への教育
受験準備講習会、オープンキャンパス、公開授業等

２　教育の理念

1）本学の基本理念「自由、自主、自律の精神」に則り、良識ある人間を育成する。
2）ジャズにおける即興演奏を体得することで、自己の表現のみならずアンサンブルの本質を探究し、そのコミュニケーションに於いて社会に貢献できる人間を育成する。

３　教育の方針・方法

レッスンや演習においては、個人の到達レベルに相当の違いがあるため、個々のレベルに即した課題や宿題をきめ細かく提示し、実際に模範演奏をすることで演奏のヒントが得られるよう工夫する。「作編曲」などの授業においては、実際に書いた譜面を演奏されることを踏まえ、より実践的なアドバイスをすることで作譜の喜びを感じられるよう工夫する。

４　改善・努力
年度によって学生の担当楽器の人数に相当のばらつきがあり、同学年の関係性が安定しないという問題点がある。ビッグバンド等のアンサンブルにおいて特に管楽器を他専修或いは他大学の学生に演奏補助を頼らざるを得ないのが現状であり今後改善する必要がある。ジャズは現在も刻々と変化しており、常に情報をアップデートし、学生に的確なアドバイスができるよう努力している。
５　評価・成果
概ね満足しているとの授業アンケートの結果が寄せられている。 （資料２:授業アンケート結果）
６　目標
本学を卒業した学生が、クラシックとジャズ両方の世界を経験することで音楽の本質を捉え、その芸術を愛でる感性を自らの人生の糧として活かして、自律して生きていくことができる教育が目標である。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	作曲専修	氏　名	今村　央子
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：
「ソルフェージュⅢ Ⅳ」
「ハーモニーⅢ Ⅳ（上級）」
「和声Ⅲ Ⅳ」
「対位法Ⅰ　Ⅱ」
「作曲理論ゼミⅠ　Ⅱ　Ⅲ　Ⅳ」
大学院：
「ソルフェージュ演習Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ　Ⅳ」
「古典対位法Ⅰ　Ⅱ」
「研究指導Ⅴ　Ⅵ」
「和声実習Ⅰ　Ⅱ」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
進路に関する相談。作曲専修以外の学生が作曲系コースの履修、大学院作曲専攻への進学を希望する場合や、大学院入試の共通試験「音楽理論」への準備のための補習をオフィスアワーで行っている。

高校生への教育
進学ガイダンス：浜松、札幌で作曲と楽典のレッスンを担当。
オープンキャンパス（5月、10月）：「楽典・ソルフェージュの勉強法」を担当。
夏期・冬期受験準備講習会（8月、12月）：ソルフェージュ科目の個人レッスンを担当。
出張授業：山形県立山形北高校にて「ソルフェージュ講座～演奏に役立つソルフェージュとは」を行った（11月）。

２　教育の理念

1）本学の基本理念に則り、『自由、自主、自律の精神を以て、良識ある音楽家、教育家を育成』する。
2）音楽家として高い次元を目指す姿勢と、学修成果を社会に還元する意識や思考を涵養する。

３　教育の方針・方法

方針
1）授業においては、ソルフェージュ・音楽理論を通じて、学生が能動的に音楽基礎能力を高め、自身の活動に生かせるような課題設定と指導に努める。
2）ゼミ・演習においては、学生個人の資質と志向を尊重しつつ、深く、そして広く探求する面白さや、学生自身が成長を実感する楽しさが伝わるよう、コミュニケーションを大切にした指導を行う。

方法 1）作曲課題、演奏等を学生とともに実践し、アドバイスの根拠を示すことにより、学生の理解を助け、自身で応用・実践ができるように働きかける。
方法 2）フィードバックの際には、長所をさらに伸ばし、足りない面はポジティブかつ継続的に取り組めるような声かけを行う。
方法 3）学生に誠実に向き合い、信頼できる音楽家かつ社会性を備えた人物であるよう、自らが「自由・自主・自律の精神」を実践する。学生が安心して勉学に励み、自信をもって活動を推進するために、信頼できる大人の身近なロール・モデルとなるよう日々研鑽する。

４　改善・努力

2024年度は大学院科目である「古典対位法」「和声実習」に関しては課題が残った。
主に２点について改善が必要である。
1点目は、留学生が多く、言語の細かいニュアンスが伝わりづらいため、視覚的に捉えやすい教材やGoogleクラスルームへの資料の掲載方法を工夫する。
2点目は、作曲専攻と器楽専攻、音楽教育専攻の学生の混合であるため、個々の学生のレベルやニーズに合わせつつ、学生の発表に際しては、分析方法やポイントなどの事前相談に応じ、まとまった発表として成果ややりがいが感じられるようにサポートする必要がある。
いずれにせよ、シラバスに則り授業の見通しを示しつつ、大学院生レベルでの和声や対位法へのアプローチの方法や実践的なアドバイスができるよう、ブラッシュ・アップを行いたい。

５　評価・成果

Google Classroomを活用し、資料や音源、課題の解答をいつでも参照できるようになったことで、特に意欲のある学生が復習を行う際の手助けになっている。そして、追加資料や動画の視聴等、授業内で完結しない、より広い学びへ誘う効果を発揮している。 また授業を欠席した学生への授業内容の共有も容易になり、欠席学生が進度への不安を感じずに授業を継続できる。 成績評価においては、学生個々の課題への取り組みを継続して追うことができるうえ、自主学習の様子も把握できるため、正確かつ公正な評価が行える。
このように、学生個々の学習状況と目標到達度を継続的かつ総合的に評価することを心がけている。

６　目標
本学を卒業した学生が、自由に、自分の道を、自律して拓いていくために、音楽理論・ソルフェージュと自らの専門が直結していることを実感し、応用できる力を身につける教育が目標である。　さらには、音楽理論・ソルフェージュ分野で、日本のみならず世界の音楽界に寄与する優秀な専門家、教育者を育てたい。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	作曲専修	氏　名	菊池　幸夫
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

1　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：
「ハーモニー　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
「ソルフェージュ　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
「鍵盤楽器作品分析　Ⅰ、Ⅱ」
「電子オルガン音楽理論　Ⅰ、Ⅱ　」
「作曲Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ」
大学院（修士）：
「作曲家作品研究　Ⅰ、Ⅱ」
大学院（博士）：
「創作領域研究」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
オフィスアワー他

高校生への教育
受験準備講習会、体験レッスン、学外指導等

2　教育の理念

音楽教育を通して、音楽の背景にある文化、社会を見つめる洞察力を養い、音楽文化の担い手としてさまざまな方面で社会に寄与する人材を育成する。

3　教育の方針・方法

1）西洋音楽を中心とした様々な実作品を深く味わい正しく理解することによって、本物を知り、本質を見極められる眼力を養い、創作、演奏における自己の真の表現方法の獲得を促す。
2）教養の獲得や技術の鍛錬により、自身の真の表現をより確かなものとする力を培う。

4　改善・努力

レッスン、授業において、対面のみならずオンライン上（メールのやりとり、Zoom、Google Classroom等）でのフォローも行っている。

５　評価・成果
アンケート結果からは、授業、レッスンともに概ね満足しているとの回答が寄せられているが、一部授業科目においては、学生の自宅学習（予習・復習）の強化を図る必要があると考える。
６　目標
個々の学生の素養・能力を踏まえながら、それぞれの可能性をいかに引き出していくかを念頭に置き、学生の目線に立った教育を目指す。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	作曲専修	**氏　名**	栗山　和樹
職　位	教授	**作成日**	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目
学部：
共通科目-コース科目（必修）
　「実用音楽ゼミⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
コース科目（選択）
　「実用音楽研究Ⅲ、Ⅳ」
　「DAW演習Ａ　Ｂ」
共通科目
　　ポピュラー音楽研究Ｃ
演奏・創作学科-ジャズ専修科目（選択）
　「ジャズ編曲Ⅰ、Ⅱ」
　「作編曲Ｃ　Ｄ」
演奏・創作学科-作曲専修科目（選択）
　「実用管弦楽法Ⅱ」
演奏・創作学科-作曲専修科目（必修）
　「作曲Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ」

初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
授業時間外に行う実習時または終了後に行う相談、オフィスアワー・メール等による

高校生への教育
「高大連携科目 ポピュラー音楽研究Ｃ」「受験準備講習会」等

２　教育の理念

1）本学の基本理念に則り、『自由、自主、自律の精神を以って、良識ある音楽家、教育家を育成』する。
2）音楽家として高い次元を目指す姿勢と、学修成果を社会に還元する意識や思考を涵養する。

３　教育の方針・方法

方針
1）実学的科目の授業においては、演習を通じて学生が能動的に自己の音楽基礎能力を応用し、卒業後、音楽社会における自身の活動に生かせるような課題設定と指導に努める。

2）音楽基礎的科目の授業においては、ヨーロッパ音楽教育の伝統を重んじ、学生が音楽基礎能力を確実に身につけ、卒業後、自身の研究活動を積み重ねていけるように課題設定と指導に努める。

3）ゼミ・演習においては、学生個人の資質と志向を尊重しつつ、深く、そして広く探求する面白さや、学生自身が成長を実感する楽しさが伝わるよう、コミュニケーションを大切にした指導を行う。

方法
1）学生とともに音楽制作現場さながらの制作活動を実践し、アドバイスの根拠を示すことにより、学生の理解を助け、自身で考え、行動できるように働きかける。

2）フィードバックの際には、長所をさらに伸ばし、足りない面はポジティブかつ継続的に取り組めるような声かけを行う。

3）学生に誠実に向き合い、信頼できる音楽家かつ社会性を備えた人物であるよう、自らが「自由・自主・自律の精神」を実践する。学生が安心して勉学に励み、自己肯定感を高め、自信をもって活動を推進するために、信頼できる大人の身近なロール・モデルとなるよう日々研鑽する。

４　改善・努力

日進月歩、進化、変化する音楽制作の状況を鑑み、新分野に臆することなく挑戦する授業の方法に挑戦していきたい。学生に新しい刺激やアイデアを与え、IT機器を使用した新しい形態の授業を行っていきたい。シラバスを元に授業ポイントを明確にして、演習の方法に工夫をさらに重ね、個別に学生の「分からない」を解決する 取り組みも一層強化したい。

５　評価・成果

専門分野の特質から、授業内の限られた時間以外で学生の提出した課題に個人的なフィードバックをし、ひとりひとりに対して添削をする必要があるため、Google Classroom等の活用により履修者全員が授業成果を共有することにより、学生同士の学びにつながっている。追加資料や動画の視聴等、授業内で完結しない、より広い学びへ誘う効果があげられている。 成績評価においては、学生個々の課題への取り組みを継続して追うことができるうえ、自主学習の様子も把握できるため、より正確かつ公正な評価が可能となった。

６　目標
本学を卒業した学生が、自由に、自分の道を、自律して拓いていくために実践的な能力を身につけさせると共に、音楽理論・ソルフェージュなど基礎科目が自らの専門が直結していることを実感し、大学で身につけた基礎能力をもとに、卒業後、ライフワークとして自ら学ぶ方法を身につける教育が目標である。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	作曲	氏　名	足本　憲治
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
ソルフェージュⅢ、Ⅳ
ハーモニー(初級)Ⅰ、Ⅱ
ハーモニーⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
管弦楽法BⅠ、BⅡ
作曲基礎講義(楽器法) 作曲基礎講義(DTM)
DTM演習I、Ⅱ
作曲Ⅴ、Ⅵ
編曲法BⅢ、BⅣ
作曲実技I、Ⅱ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

その他
オフィスアワーなど学生からの相談への対応、補習等
高校への出張授業
受験準備講習会
オープンキャンパス等

２　教育の理念

『啐啄同時』を常に心がけること。また、本学の基本理念『自由、自主、自律』を大本とすること。

３　教育の方針・方法

正確な情報を的確な順序で伝えることを大きな方針とし、また、併せて学生の自発的な疑問・考察の創発を強く促す。方法として、長期的な取り組みと短期的な取り組みとを常に意識した教材展開を行う。

４　改善・努力

世の変化とともにいわゆる基礎学力のあり方そのものも変容していく。それらに対し広い視野を持ちつつ正確に把握する努力を続ける一方、本質的部分を見極める姿勢を保ち授業を改善してゆく。

５　評価・成果

概ね満足しているとの授業アンケートの結果が寄せられている。(資料2)

６　目標
疑問がなければ学びは生まれない。学生が広い興味・深い疑問を更新していける授業内容と、その更新を促す刺激を与え続けることを目標とする。豊かな実例の提供とそれに対する多面的な視点の涵養を旨とする。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	作曲専修	氏　名	富貴　晴美
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：「実用音楽ゼミⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
「編曲法AⅠ、AⅡ、AⅣ」
「商業音楽概論A、B」
「キーボード・ハーモニー応用BⅠ、BⅡ」
「実用管弦楽法Ⅰ」
「実用音楽研究Ⅳ」
「ハーモニーⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
「作曲Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
オフィスアワー、メール等

高校生への教育
「受験準備講習会」「体験レッスン」等

２　教育の理念

１）本学の基本理念に則り、『自由、自主、自律の精神を以って、良識ある音楽家、教育家を育成』する。
２）音楽家として高い次元を目指す姿と、学修成果を社会に還元する意識や思考を涵養する。

３　教育の方針・方法

それぞれの学生の個性や特性を尊重しながら、プロの音楽制作現場と同じスタイルで制作活動の実践を行うことで、卒業後に社会で生かせる技術が習得できるような課題と指導を行う。

４　改善・努力

レッスン、授業において、対面のみならずGoogle Classroom、メールを通してのフォローを適宜行い、学生の自宅学習の強化を図っている。

５　評価・成果
概ね満足しているとの授業アンケートの結果が寄せられている。（資料2）
６　目標
本学を卒業した学生が、社会に出て仕事をする時、信頼される人間性と実力を持ち合わせた人材となるよう、真摯に向き合い熱意を持って指導できるよう努める。また将来、学生の実力が発揮できる場を提供できるように、自分自身が社会貢献に対して努力を怠らないようにする。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	作曲・音楽理論	**氏　名**	渡辺　俊哉
職　位	准教授	**作成日**	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談

高校生への教育

２　教育の理念

・柔軟で自由な発想を養い、独創的な作品を創作できる人材を育成する。
・自ら考え実践する、能動的な姿勢を育成する。

３　教育の方針・方法

方針
・基礎的な音楽的能力を身につけた上で、学生が自主的にものを考え、表現できるようにする。
方法
・上記の方針を達成するためには、個々人の学生の個性を引き出し、それらを尊重しながら伸ばしていくことが重要であると考える。

４　改善・努力

教育活動と同時に常に作曲活動も行うことで、常に学生には現場の刺激を与え、様々なものへ興味を抱くように導きたい。幅のある豊かな音楽家になることが、これからは、重要であるということをより一層強調していきたい。
また、共通必修科目である「ハーモニー」や「ソルフェージュ」の習得が、実際の演奏においてどのように結びついているかを丁寧に説明し、彼らの学修意欲を引き出すことが、引き続き自身の努力目標である。机上の空論にならないように心掛けたい。

５　評価・成果
アンケートは概ね高評価であった（資料２）。 引き続き、それぞれのクラスに合った授業を心掛けていきたい。
６　目標
創造性に溢れた学生を多く輩出し、自立した豊かな音楽家に育てることが大きな目標である。そのためには、自らもアップデートしながら、教育に向き合いたい。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	コンピュータ音楽専修	**氏　名**	今井　慎太郎
職　位	准教授	**作成日**	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）

学部：

コンピュータ音楽創作Ⅰ～Ⅳ

コンピュータ音楽ゼミⅠ～Ⅳ

大学院：

音楽テクノロジーⅠ～Ⅱ

ライブエレクトロニクス演習

コンピュータ音楽演習Ⅰ～Ⅳ

研究指導Ⅰ～Ⅵ（博士後期課程）

初年次教育・専門課程開始時教育

「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談

研究室の常時開放、オフィスアワー、Slack、メール等

高校生等への教育

受験準備講習会、オープンキャンパス、附属高校特別授業、

初等・中等教育教員へのコンサルティング等

２　教育の理念

コンピュータと音響、創作を一体として学び、その成果を作品や研究、ひいては広く音の世界に応用してゆける、広義の「音楽家」を育成すること。

３　教育の方針・方法

構成論的アプローチを基本方針とする。個別の技能について統合したりそれらを別の視点から捉える契機として作品制作を捉える方法で、カリキュラムを策定する。

４　改善・努力
常に進化し続けるテクノロジーを扱う領域において、最先端の試みをキャッチアップする努力を続ける一方、それでも変わらぬ原理的な部分を見極めながら、授業を改善してゆく。
５　評価・成果
概ね満足しているとの授業アンケートの結果が寄せられている。 （資料２：授業アンケート結果）
６　目標
学生が各々の創造性を発揮できる環境を維持すること。そのために、権威主義やパターナリズムを排し、相互尊重と相互扶助を、コミュニケーションの原則とする。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	コンピュータ音楽専修	氏　名	片桐　健順
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）

学部

コンピュータ録音演習Ⅰ～Ⅳ
コンピュータ音響実習AⅠ～Ⅱ
コンピュータ音響実習BⅠ～Ⅱ
コンピュータ音楽実習E
コンピュータ音楽実習F
コンピュータ音楽ゼミⅠ～Ⅳ

大学院

テーマ別演習AⅠ～Ⅱ
テーマ別演習BⅠ～Ⅱ

初年次教育・専門課程開始時教育

「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

その他

広報宣材映像における音楽の録音・編集・マスタリング作業（一部）
学内演奏会において音響技術を必要とする際のプラン・オペレーション（一部）

２　教育の理念

・　音楽や芸術作品の創作、もしくは創造を目指す学生が、様々な技術的かつ思考的視点からの発想することを身につける
・　一つの方法に留まらず様々な方策を身につけることにより、予定外の状況においても対処できる能力を身につける
・　上記能力をもって様々な創造・研究に邁進できる様になる

３　教育の方針・方法

・　授業内での質疑のみならず随時声かけを行ない、発想・発展が停滞することの無い様に努めている
・　停滞が見られる学生には、周囲の状況等も鑑みて、改善ができる様に助言を行う
・　学生の自発性が乏しい際は、例示を行い発想がスムーズに行える様に補助を行う
・　楽器と同様に、機材類に対して取り扱いの熟知、習熟を図る
・　一人の力ではなく多くの人の力で実現できることを認知する
・　授業時間外においても学生の発想・知見・習熟に寄与するような事象があれば、積極的に紹介、また参加を募る

４　改善・努力
・　授業資料はGoogle Classroomやメールで発信し、後でいつでも振り返れる様に努めている ・　サイズの大きな資料やデータはGoogle Driveを用いて、個人PCなどの負担が大きくならない様に心がけている ・　学生からの提案、事案は誠実に受け止め、対応を行う
５　評価・成果
授業アンケートは概ね満足と結果がある（資料２）。
６　目標
音楽や芸術、技術や理論などを学んで様々な知見や能力を身につけ、音楽業界や芸術界において活躍し、豊かな社会になるような活動、また貢献できることを目指す
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	コンピュータ音楽専修	**氏　名**	濵野　峻行
職　位	准教授	**作成日**	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部
　学部必修科目「マルチメディア・プログラミングⅠ～Ⅳ」「卒業論文Ⅰ～Ⅱ」
　学部選択科目「コンピュータ音楽実習Ａ」
　コース科目　「音楽データサイエンス研究ゼミⅡ」
　教養科目　　「教育メディア論」
大学院
　「研究法Ⅰ～Ⅲ」
　「研究指導」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
　研究室の常時開放、オフィスアワー、電子メール、
コミュニケーションツール（Slack）等による相談

高校生への教育
　附属高校での授業（音楽プログラミング）、受験準備講習会、オープンキャンパス、
出前授業

２　教育の理念

本学の教育理念である「自由、自主、自律の精神を以て良識ある音楽家、教育家を育成し、日本および世界の文化の発展に寄与する」ということについて、学生自らが多様な視点からその理念の本質、すなわち「未来の音楽家はどうあるべきか」や「文化の発展に寄与するためにはいかなる価値を生み出すべきか」について常に問い、実践をとおして理念を体現できる新時代の音楽家を育成する。

３　教育の方針・方法

以下の項目について学生が理解し、実践することを教育の方針とする。

1）テクノロジーが音楽に関わるあらゆる人々（演奏家、クリエイター、アーティスト、マネージャー、研究者、教育者、ビジネスパーソン）の将来に影響を与えるものであることを理解すること。そのために音楽表現に関わるテクノロジーを技能として身体化し、社会的意義を意識しながら多彩で創造的なアウトプットを行うこと。

2) アカデミックかビジネスかを問わず音楽を取り巻く多様な隣接領域の価値観を理解し、学際的研究の観点から課題発見に努め、音楽体験のデザインを実践すること。

これらの方針の実現に向け、以下の方法を採る。

- 講義：研究の方法論、情報リテラシー、情報モラル・セキュリティ教育、メディアアート・創作表現のためのエンジニアリング等について、基礎から応用まで幅広く知識を教授する。
- 演習：ICTを活用した情報処理能力、ならびに各種表現（文書、数値、口頭表現、創作表現）のための技能を身につけさせる。
- 実習：学術文書執筆の実践、作品制作・研究開発とその発表、プレゼンテーションについて指導する。

上記の各実践においてはアクティブ・ラーニングの手法を適宜取り入れ、学び合いを通した主体的な学習を促す。

４　改善・努力

- 効率的に多くの学生が学習意欲を高められるよう、コミュニケーションツールでの情報提供を常時行ったほか、「５　評価・成果」に挙げた学習機会の創出により外部との接点をなるべく多く創出し、個々の学びが社会とつながることを意識させるよう工夫を行った。
- 他方、学生が抱える学習上の障壁についても、個人レベルで向きあうよう努めた。教養科目を含めたすべての授業で、学生の希望調査アンケートや個人指導を必ず時間を取って行うようにしている。また気になる学生に対しては授業時間外に別途個別面談を行い、課題発見と解決に努めた。

５　評価・成果

科目「マルチメディア・プログラミングⅡ」について資料２の授業アンケートによると、複数科目に対する評価ではあるが、「予習・復習時間」の項目を除いてすべての項目について「5」を回答したものが最も多く、学生にとっては学びの内容、質ともに納得のいくものであったと評価できる。

また「１　教育の責任」に挙げた項目とは別の成果として、以下の取り組みを実施し、学生に学習の機会を提供した。

- 外部研究発表の指導（国内学会、インターカレッジ）
- オンライン教育プログラムの導入・指導（聴能形成）
- 自身の研究における学生との共創を通じた指導（アプリケーション開発）
- 自身が運営する企業での学生インターンの実施
- 毎週放課後に技術研鑽同好会の実施

６　目標

学生が表現者としての知と技を身につけ、自己と他者についての理解を深めることで、将来自らの活動の幅を広げ、社会的価値の創造ができる人材となれることを目指す。そのために学生一人ひとりの関心を広げ、学びの欲求に応えることを丁寧に続けることを常に目標とする。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	音楽教育	**氏　名**	井上　恵理
職　位	教授	**作成日**	2025年6月25日

１　教育の責任

担当科目
学部
ソルフェージュⅠ、Ⅱ
音楽教育演習（リトミック）Ⅰ、Ⅱ
専門ゼミⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
音楽教育演習（即興演奏法）Ⅰ、Ⅱ
卒業研究
キーボード・ハーモニー入門ＢⅠ
キーボード・ハーモニー応用ＡⅠ、ＡⅡ
即興演奏法Ⅰ、Ⅱ
学校教育専門演習Ａ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ」

教職課程特別講座
実技試験対策

高校生対象の授業、講座
出張体験授業
オープンキャンパス体験授業
附属高校集中講義

社会人対象の講座
リトミック夏期講座

その他
ソルフェージュ合同授業（1年生全員）
相談 オフィス・アワー、メールによる相談
グローバルセンターにおいての留学生への対応
国際交流協定を結んだ大学との交流
第４回ジュネーヴ・リトミック研修（2025/3/7～2025/3/16）
国立音楽大学附属幼稚園の教員対象のリトミック研修

2　教育の理念

(1)音楽と人間の心と身体に関わる問題に常に関心を持ち観察し、自ら問いかけて答えを見つける力を身につける。
(2)音楽・アーツ（芸術）を通して、心身が健やかで豊かな人を育て、社会を育てる力を身につける。
(3)多様な音楽の世界で、多様な人々をナビゲートできる知識と技量を身につける。

3　教育の方針・方法

(1)音楽と人間に関わる問題に常に関心をもち、自ら問いかけて答えを見つける力を身につけるために。
①感動する音楽体験ができる環境をつくること。どうして感動したのか、どこに感動したかを言葉にして伝えることができること。
②音楽と言葉、音楽と人間、音楽と社会にまつわる文献や、書籍を読むこと。
③一人の意見、一つのメディアからの情報ではなく、多数のものから多角的に情報を得て考える力を身につけること。
④授業科目「リトミック」は音楽の基礎であるので、リトミックの学びを他の授業科目（ソルフェージュ、ハーモニー、音楽講義）や実技レッスン、専攻実技の演奏表現や楽曲分析とリンクづけて活用できるようにすること。

(2)音楽・アーツ（芸術）を通して、心身が健やかで豊かな人を育て、社会を育てる力を身につけるために。
①「音楽は食なり」と私は考えている。学生にもそのことを具体的な事例とともに提示する。音楽教育と食育、音楽文化と食文化を結びつけ、それらの大切さを学生と共に考える。
②美術、舞踊、演劇等々、芸術に興味をもち、音楽とリンクして考える。

(3)多様な音楽の世界で、多様な人々をナビゲートできる知識と技量を身につけるために。
①時代、文化、様式の異なる様々な音楽を授業で取り扱う。それぞれの時代、文化、様式の持つ価値を知る。
②グループワークを通して、また自分の考えを実践、発表する中で、自分の好きな音楽を発見すること。
③子どもから高齢者、多様な心身の特徴を持つ人との共同ワークを考えていく。

4　改善・努力

・ 学生が主体的に取り組むことができるように、グループワーク、作品制作（創造）を行い、クラス内だけではなく、それらを発表する場を設けた。それぞれの学生が自分の個性、特技を生かした実践ができ、そこからお互いに学び合う環境づくりを設定した。
2024年度は、芸術祭、地域活性講座（立川市、砂川学習館）、MUSICスペースで発表し

た。
・音楽教育専修の学生たちの音楽活動発表の場として「演奏発表会～Listen to ME～」を開催。実行委員会を設置して学生たちの主体的な活動に結びつけた。
・在学生の有志合唱団と卒業生の有志合唱団の合同活動を学外で開催した。（「おんたま」）
・Google Classroomを、個人の課題の提出に活用して個別にフィードバックを行った。グループの中では、十分に発信できない学生にとっては、有効な手段であり今後も活用していく。しかし、学生の承諾を得た場合は、個別提出の作品を公開してお互いに学びあった。

5　評価・成果

・おおむね満足しているとの授業アンケートの結果が寄せられている。
・コロナで中断していたジュネーヴ・リトミック研修を７年ぶりに実施し、17名の学生が参加し、成果があった。

6　目標

・短期的目標：
学生自身が自分自身のために、及び、社会のために音楽を通して活動できるようになること。
・中長期的目標：
2013年に本学と交流協定を結んだ「スイス・ジュネーヴ高等音楽院」と定期的な交流（ジュネーヴ・リトミック研修　2013年、2016年、2018年実施）の継続。本学の学生、卒業生の留学へのサポート。教員同士の交流。
・国立音楽大学のダルクローズ・リトミック教育とスイスのHEM(Haute Ecole de Music) IJD(Institut Jaques～Dalcroze)のダルクローズ・リトミック教育、およびアジア、欧米地域の教育と交流。
・E .J.Dalcroze に関する文献の整理

7　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	音楽文化教育学科	氏　名	瀧川　淳
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）

学部：音楽教育講義Ｂ
専門ゼミⅡ、Ⅲ、Ⅳ
卒業研究
学校教育課題研究Ⅰ、Ⅱ
音楽科教育法Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
教育実習ＡＢ

大学院：音楽教育学研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
音楽教育研究法Ⅱ、Ⅳ

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

２　教育の理念

１）音楽および音楽教育に関する幅広い知識や技能を身につけ、主体的、協働的、創造的な学習活動を組織することができる音楽ナビゲーターを育成する（学部）。
２）音楽教育学に関する幅広い知見を持って、自己の研究テーマを深く追求できる音楽教育学の研究者、指導者を育成する（大学院）。

３　教育の方針・方法

１）音楽および音楽教育に関する幅広い知識や技能を身につけ、主体的、協働的、創造的な学習活動を組織することができる音楽ナビゲーターを育成するために、

1. これまで学んできた音楽に関する知識に対して批判的な検討を加え、より幅広い知見を持てるようにする。
2. 音楽教育や学校教育、また音楽と社会について、理論と実践の往還を通して学び深められるようにする。
3. 音楽に対する自分自身の見方・考え方を他者と共有することができるようICT機器の積極的な使用や、発表の場を積極的に組織する。

２）音楽教育学に関する幅広い知見を持って、自己の研究テーマを深く追求できる音楽教育学の研究者、指導者を育成するために、

1. 音楽教育学に関するこれまでの研究成果や最新の知見を提供する。
2. 学会や専門分野に関わる研究会などへの参加を促し、より幅広い視野を持って、自分の研究テーマに深く関わることができるようにする。

４　改善・努力

・さらに、より個人のニーズに適した個別支援に努める。
・クラス講義においては、事前の学習に対してより徹底した学習を促す。
・外部との連携をより密にし、学生の現場への実際的な知見を深められるよう進める。

５　評価・成果

・概ね満足しているとの授業アンケート結果が寄せられており、特に講義の内容や進め方は、学生からの評価も高い。学生のニーズに寄り添いながら進められているのではないだろうか。

６　目標

・短期的目標：学生のニーズに応えることのできる質の高い講義を計画する。その際には、音楽教育に関する他の学びとの関連性をより一層意識した内容の組織を心がける。
・長期的目標：学生が音楽ナビゲーターや研究者として活躍できるよう長い視野の中で講義等を位置付けられるよう内容・方法の改善・充実に努める。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	音楽文化教育学科 音楽教育専修	氏　名	津田　正之
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）

学部

音楽教育講義Ａ（前半）
音楽・学び・情報（前半）
教育実習ＡＢ
音楽教育講義Ｄ
教職実践演習ＡＢ
専門ゼミⅡ（部活動）

大学院

音楽教育学研究ⅠⅡ
音楽教育教材研究ＡＢ

初年次教育・専門課程開始時教育

「基礎ゼミⅠ」

教員採用試験対策

二次試験対策講座　学習指導要領対策講座、実技講座など

その他

オープンキャンパス相談、オフィスアワー、メールによる相談など

２　教育の理念

1）音楽及び音楽教育に関する幅広い知識や技能を身に付け、主体的、協働的、創造的な音楽学習活動を組織できる音楽ナビゲーターを育成する。（学部）
2）音楽教育学に対する幅広い知見を持ち、自己の研究テーマを深く追究できる音楽教育学の研究者・指導者を養成する。（大学院）

３　教育の方針・方法

1）を実現できるようにするために、次の方針・方法で臨む。

① 音楽とは何か、音楽教育の理念と方法などについて、これまでの研究成果をもとに考え、知識や思考を深めるようにする。
② 音楽教育に関する学び方やプレゼンテーションの仕方などについて、発表の場をつくり、基礎的な技能を習得できるようにする。
③ 音楽活動の意図や目標、学習者の状況などを踏まえて、具体的な教材や学習活動を考え、学校現場や公共ホールをはじめ、養護施設、高齢者施設などの様々な場において、多様な学習者との音楽活動の場を組織する。

2)を実現できるようにするために、次の方針・方法で臨む。
① 音楽教育学について幅広く学ぶことができる内容を提供するとともに、研究方法などについて丁寧に個別指導を行う。
② 学会や専門分野に関わる研究会などへの参加を促し、そこから得た知見を自らの研究に生かすように働きかける。

4　改善・努力

・全ての科目でGoogle Classroomを活用し、資料をオンライン上で共有できるようにするとともに、授業内やClassroom上で学生の取組のよさを伝え、共有できるように努めた。
・同じ授業及び関連する授業を担当する教員間で連携をとり、授業内容の質の担保を図るとともに、外部でのＷＳなどについては、適宜、連携・協力をしながら進めた。

5　評価・成果

・全ての担当科目で概ね満足している（４以上）とのアンケート結果が寄せられた（一方、授業前後の予習復習時間の確保などについては課題がみられた）。
・信州大学及び外部の有識者と連携したアウトリーチ活動を実施することができた。
・修士課程１年４名が学会に参加して知見を広げるとともに、音楽教育学の博士学位取得者（１名）を出すことができた。

6　目標

【短期的目標】
・学生が学びを実感できる授業、「授業前・授業・授業後」の学びがつながる授業づくりを工夫する。
・心身に様々な問題を持つ学生が多いことも踏まえ、学生との関係づくりに努める。
【中長期的目標】
・音楽教育専修（学部）、音楽教育学専攻（大学院）及び教職科目を履修した学生が、音楽のナビゲーターや研究者、教員として安定した環境で活躍できるよう、長期的な視野から授業内容の改善・充実に努める。

7　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	音楽療法専修	氏　名	岡崎　香奈
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
音楽療法専修必修科目
　「音楽療法講義Ⅲ・Ⅳ」（共通選択科目）
　「歌唱実習Ⅰ・Ⅱ」
　「専門ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」
　「卒業研究」
音楽療法士コース必修科目
　「音楽療法臨床研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」
学科必修科目
　「音楽・心・からだ」

初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

その他
　　出張体験授業、オープンキャンパス体験授業

相談
　　オフィス・アワー、メールによる相談

高校生への教育
　　附属高校出張授業、サマー集中講義

２　教育の理念

(1) 人間の生と音楽の関わりに関心を持つ学生、特に音楽療法家を志す学生が、社会における人間の健康に対する十分な理解のもと、音楽の多様な働きや影響を柔軟・適切に用いて活動する力をつける。
(2) 人間の生と音楽の関わりに関心を持つ学生、特に音楽療法家を志す学生が、医療・福祉・教育・地域社会などにおける音楽療法活動を実践的に学び、展開できる。

３　教育の方針・方法

(1) 社会における人間の健康に対する十分な理解のもと、音楽の多様な働きや影響を柔軟・適切に用いて活動する力をつけるために、
1 音楽と健康との関わりについて、生理的・心理的・社会的な側面から幅広く検討する。
2 障害児・者、コミュニティ領域での音楽療法について、背景や理念と実践例を結びつけながら授業を行う。授業者による模擬活動も取り入れる。

3 臨床現場を想定した弾き歌いや歌唱活動を通じて、対象者や目的に応じた活動の計画～実施～振り返りという一連の流れを体験する。
(2) 医療・福祉・教育・地域社会などにおける音楽療法活動を実践的に学び、展開するために、
1 学外の様々な施設で臨床実習を行い、実際の音楽療法の現場に見学参加する。
2 臨床実習での経験をフィードバックする授業で、活動の振り返りと今後の見通しを得る。

４　改善・努力

・ 音楽療法の役割や意義は社会状況の変化に応じて変化し、多様化している。それに伴う現代的なトピックを取り入れると共に、授業者が学外で行っている実践活動についても随時紹介するようにした。
・ 学生が主体的に授業に取り組むことができるよう、グループ演習や対話を取り入れた。
・ すべての授業でGoogle Classroomを併用し、資料と課題の配布を行った。また、Google Classroomで授業の感想や質問を受け付け、個別にフィードバックを行っている。なかでも重要と思われるものについては、授業の最初にまとめて全学生にフィードバックをした。

５　評価・成果

概ね満足しているとの授業アンケートの結果が寄せられている。
（資料２：授業アンケート結果）

６　目標

・短期的目標：学生が興味と意欲を持って主体的に学ぶことができる環境を作る。そのために、学生と教員の垣根を越えた協働的な関係作りを心掛ける。
・中長期的目標：音楽療法の基礎的な力を身につけた学生が、社会の様々な場面で自らの力を生かして貢献できる。そのために、多様な働き方や卒業後の継続的学びの可能性を提示する。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	音楽療法専修	氏　名	三宅　博子
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

1　教育の責任

担当科目(資料1)
音楽療法専修必修科目
　「音楽療法講義Ⅰ・Ⅱ」（共通選択科目）
　「器楽合奏Ⅲ・Ⅳ」
　「専門ゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」
音楽療法士コース必修科目
　「音楽療法臨床研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」
音楽教育専修必修科目
　「音楽教育講義D」

初年次教育
　「基礎ゼミⅠ」

その他
　出張模擬授業、オープンキャンパス体験授業

相談
　オフィス・アワー、メールによる相談

高校生への教育
　附属高校2年生対象「音楽文化教育講座」

2　教育の理念

(1) 人間の生と音楽の関わりに関心を持つ学生、特に音楽療法家を志す学生が、社会における人間の健康に対する十分な理解のもと、音楽の多様な働きや影響を柔軟・適切に用いて活動する力をつける。
(2) 人間の生と音楽の関わりに関心を持つ学生、特に音楽療法家を志す学生が、医療・福祉・教育・地域社会などにおける音楽療法活動を実践的に学び、展開できる。

3　教育の方針・方法

(1) 社会における人間の健康に対する十分な理解のもと、音楽の多様な働きや影響を柔軟・適切に用いて活動する力をつけるために、
　1　音楽と健康との関わりについて、生理的・心理的・社会的な側面から幅広く検討する。
　2　障害児・者、コミュニティ領域での音楽療法について、背景や理念と実践例を結びつけながら授業を行う。授業者による模擬活動も取り入れる。

3　臨床現場を想定した合奏や即興、創作活動を通じて、対象者や目的に応じた活動の計画～実施～振り返りという一連の流れを体験する。

(2) 医療・福祉・教育・地域社会などにおける音楽療法活動を実践的に学び、展開するために、

1　学外の様々な施設で臨床実習を行い、実際の音楽療法の現場に見学参加する。

2　臨床実習での経験をフィードバックする授業で、活動の振り返りと今後の見通しを得る。

4　改善・努力

- 音楽療法の役割や意義は社会状況の変化に応じて変化し、多様化している。それに伴う現代的なトピックを取り入れると共に、授業者が学外で行っている実践活動についても随時紹介するようにした。
- 学生が主体的に授業に取り組むことができるよう、グループ演習や対話を取り入れた。
- すべての授業でGoogle Classroomを併用し、資料と課題の配布を行った。また、Google Classroomで授業の感想や質問を受け付け、個別にフィードバックを行なっている。なかでも重要と思われるものについては、授業の最初にまとめて全学生にフィードバックをした。

5　評価・成果

概ね満足しているとの授業アンケートの結果が寄せられている。
（資料２：授業アンケート結果）

6　目標

・短期的目標：学生が興味と意欲を持って主体的に学ぶことができる環境を作る。そのために、学生と教員の垣根を越えた協働的な関係作りを心掛ける。
・中長期的目標：音楽療法の基礎的な力を身につけた学生が、社会の様々な場面で自らの力を生かして貢献できる。そのために、多様な働き方や卒業後の継続的な学びの可能性を提示する。

7　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	音楽情報専修	氏　名	神部　智
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
【学部】
「音楽概論A・B」
「西洋音楽史概論A・B」
「音楽情報研究法Ⅰ・Ⅱ」
「作品研究C」
「鍵盤音楽史A」
「マネージメント実習Ⅳ」
「音楽情報を発信するⅠ」
【大学院】
「研究法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（音楽理論・ソルフェージュ）」
「研究法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（弦管打楽器）」
「指導法／教授法」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅡ」

相談
オフィスアワー、メール

２　教育の理念

（１）音楽全般に関する学問的探究を通して、様々なビジネスに対応できる幅広い視野と技能を持った人材を育成する。
（２）音楽的事象に対して独自の研究テーマを見出し、自主的な研究活動を展開することで、国際社会や学会に広く貢献できる研究者、指導者を養成する。

３　教育の方針・方法

（１）音楽に関する専門的知識のみならず、あらゆる本質的問題や現代的課題を見出す柔軟な発想力を養うようにする。
（２）アカデミックなルールを習得し、論理的なアプローチを持って音楽研究ができるようにする。
（３）学生の自主的な学修を尊重し、個々の授業においてはプレゼンテーションで研究成果を発表したり、ディスカッションやワークショップ、グループ学習等で自分の意見を積極的に発信したりすることができるようになる。

４　改善・努力

（１）Google Classroomを活用し、資料の共有や各課題のフィードバックを迅速に行った。
（２）授業においては音源だけでなく、画像や映像資料も積極的に用いて、有効な情報を分かりやすく合理的に伝えるよう工夫した。
（３）学生の主体的な学修を促すため、アクティブラーニング（ディスカッション、ワークショップ、グループ学習、ソクラテス問答など）の導入を行った。

５　評価・成果

授業アンケートでは、概ね満足であるという結果が寄せられている。（資料２）

６　目標

短期的目標：様々な音楽的事象に興味や関心、あるいは疑問を抱いて自ら研究課題を発見し、それに対して学問的にアプローチできる姿勢を学生に持たせる。
長期的目標：国内、国外での学会における口頭発表、学会誌への論文発表を推進し、それをサポートする。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=o
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	音楽情報専修	**氏　名**	早稲田　みな子
職　位	教授	**作成日**	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）

初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」
専修必修科目
　「音楽情報を読み解くⅢ」
　「音楽学入門」
　「専門ゼミⅢ、Ⅳ」
　「卒業研究」
　「音楽情報を集めるⅡ」
専修選択科目
　「音楽民族学B」
　「原書講読（英語）Ⅰ」
　「インターンシップ」
基礎科目
　「音楽文化論AB」
教養科目
　「日本語文章術AB」
学科共通必修
　「音楽・社会・キャリア」
学科共通選択
　「Music Cultures in Japan」
共通選択科目
　「楽器学概説C」
　「楽器学概説D」
大学院科目
　「テーマ別演習AⅠⅡ、BⅠⅡ（日本近現代の音楽）」
　「音楽学演習ⅠⅡ」
　「楽器学研究B」
　「領域研究ⅠⅡ」
　「研究指導ⅠⅡ」
　「特別総合演習ⅠⅡ」
外国人特別研究生
　「個人指導」

２　教育の理念

１）音楽を構造や音響の側面からのみならず、文化の諸分野、歴史、社会との関係性の中から理解しようとする態度と、その方法を身につける。
２）音楽文化の多様性に関する関心と理解を高め、幅広い視野と知識、および自身の文化的立ち位置に対する意識を育む。
３）物事に対する問題意識、探究心を常に持ち、疑問点について徹底的、かつ多角的に取り組む態度と、その方法、能力を身につける。
４）物事を批判的、分析的に考察し、自身の思考を論理的に組み立て、適切な資料とともに論証することができる。

３　教育の方針・方法

１）音楽を構造や音響の側面からのみならず、文化の諸分野、歴史、社会との関係性の中で理解できるようにするために、音階、構造、音色などの音楽そのものに関する情報に加えて、その音楽が生まれ育まれた歴史的、社会的背景や、その変遷と音楽の関わりを常に扱っていく。
２）音楽文化の多様性に関する関心と理解を高め、幅広い視野と知識、および自身の文化的立ち位置に対する意識を育むために、欧米を含む世界各地の音楽文化について、伝統音楽からポピュラー音楽や文化融合・変容したものまで幅広く扱い、日本との比較を含め、その特徴や意義について考察する。
３）物事に対する問題意識、探究心を常に持ち、疑問点について徹底的、かつ多角的に取り組む態度と、その方法、能力を身につけるために、学生それぞれが関心をもつ事柄について、問題意識の持ち方を助言し、また多様な資料・情報収集の方法について、図書館ワークショップ、パソコン実習、課題等を通じて実践的に指導する。
４）物事を批判的、分析的に考察し、自身の思考を論理的に組み立て、適切な資料とともに論証することができるために、資料の読み解き方、まとめ方、収集した情報に基づく考察・分析の深め方、論考のまとめ方・伝え方を、口頭発表、ディスカッション、レポート等を通じて、実践的に指導する。

４　改善・努力

すべての授業においてGoogle Classroomを利用し、各回の資料、課題、進捗状況が把握しやすくなるよう努めた。また課題ごとに随時フィードバックや採点を行い、学生が各自、自分の達成度を確認できるようにした。「原書講読」ではGoogle Documentを共同編集することで、各学生の翻訳と教員によるその添削をクラス全体で共有し、相互の学びを促した。講義系の授業でも、学生への問いかけや、学生の参加を導入することで、集中力を途切らせないよう努力している。

５　評価・成果

これまでの授業アンケートでは、おおむね満足しているという結果が出ている。
（資料２：授業アンケート結果参照）
修士論文を指導した学生の１人が優秀賞を受賞することができた。また別の１人は博士後期課程に進むことができた。

６　目標
多様な関心をもつ様々な学生たちに寄り添いつつ、いかにその視野を広げ、知識を深めることができるかを継続的に模索していく。 大学院生が、それぞれの研究を適切かつ効率的に展開し、その成果を随時発表しつつ、目標とする学位取得を達成することができるよう、ともに学びサポートしていく。 外国人大学院特別研究生が、言語や文化の違いを乗り越え日本の環境に適応し、修士課程に進めるよう、学修面、精神面ともにサポートしていく。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	音楽情報専修	氏　名	塚田　花恵
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部：
- 「西洋音楽史概説A，B」
- 「音楽概論A，B」
- 「音楽情報を読み解くⅡ」
- 「作品研究B」
- 「原書講読（フランス語）Ⅰ，Ⅱ」
- 「マネージメント実習Ⅱ」
- 「インターンシップ」

大学院：
- 「研究法Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ」
- 「原典講読（作曲）Ⅰ，Ⅱ」
- 「研究指導Ⅴ，Ⅵ」
- 「研究指導Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ」（研究生）

初年次教育・専門課程開始時教育
- 「基礎ゼミⅠ」

相談
　オフィスアワー、Google Classroomやメールなど

高校生への教育
　オープンキャンパス、公開授業

２　教育の理念

・音楽学分野の学知の教授を通して、人間の芸術的営為に対する知的好奇心と、他者の文化に対する敬意をもった市民を育成する。

・音楽学研究と結びついた演奏会デザインの実践的教育を通して、世界の音楽文化への幅広い知識と深い理解をもち、それを発展的に継承していくことのできるアートマネージメント人材を育成する。

・西洋芸術音楽の歴史研究の実践的な指導を通して、確固たる知的基盤と高い言語表現力の上に、優れた演奏・創作を展開することのできる音楽家を育成する。

３　教育の方針・方法

・音楽史関連の講義科目においては、西洋芸術音楽の主要な作曲家・作品の知識を身につけると共に、近現代の音楽文化を歴史的なパースペクティヴで把握できるようになることを教育目標とし、学生とその到達目標を確認・共有することを心がける。

・音楽情報専修の教育においては、西洋近代の「芸術」としての音楽について、内側から批判的に検討してきたニュー・ミュージコロジーの知見を、音楽学の基礎として位置づけて、初年次の教育のなかで「芸術音楽」の功罪について議論する機会を作る。

・マネージメント・コースの科目においては、作曲家・作品の徹底的な理解という音楽学研究の基礎を踏まえて、演奏会デザインの実践を行う。

・アカデミック・ライティングに関する教育においては、研究という営為の基礎を身につけさせると同時に、学術研究と演奏・創作実践とが有機的につながっていくように、学生個人の音楽家としての関心に寄り添うことを心がける。

４　改善・努力

・本年度は、学内の個人研究費の助成を受けて、中世・ルネサンス音楽の視聴覚教材の作成を行った。次年度以降の西洋音楽史概説と音楽概論の講義では、それを活用することにより、予習復習の指示の出し方や課題の与え方に関して、様々な工夫をしていきたい。

・アカデミック・ライティングにおけるChatGPTの使用について、その問題点と有効な使い方を把握し、学生に適切な指示を出すことが、喫緊の課題であると考えている。

５　評価・成果

授業アンケートでは、概ね満足との回答が寄せられている。

６　目標

引き続き、西洋音楽史の教材（特に20・21世紀音楽史に関するもの）の整備を進め、基礎科目の教育を充実させたい。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	音楽情報専修	**氏　名**	瀬尾　文子
職　位	准教授	**作成日**	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
・学部 基礎科目
「音楽概論AB」
「西洋音楽史概説AB」
共通選択科目
「音楽美学A」
「宗教音楽史A」
「原書講読（ドイツ語）Ⅰ、Ⅱ」
教養科目
「美学入門」
専修選択・コース必修科目
「音楽情報の編集・加工Ⅰ・A」
専修必修科目
「専門ゼミⅢ、Ⅳ」
「卒業研究」
・大学院
「研究法Ⅰ(混合）、Ⅱ、Ⅲ（鍵盤・伴奏）」
「音楽美学研究/特講B」
「研究指導」
・初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミI、Ⅱ」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
オフィス・アワー、メール、Zoomでの個人面談

２　教育の理念

①学問・芸術という天井のない世界において人は永遠に探究する身であるから、その姿勢を自ら示すことで学生を感化するのが、理想的な教育のあり方である。
②指導や評価に際しては、学生の「いま」の能力よりもむしろ、「これから」の伸びしろに重点を置く。
③高等教育においては、学習者の主体的な姿勢が何よりも肝心である。

３　教育の方針・方法

①のため、知識や考え方を押しつけるのではなく、問いを共有し、共に考える姿勢を大切にする。具体的には、問いの意義や目的、考えの道筋やその限界を丁寧に説明し、学生の声を聴く機会を多く設ける。
②のため、学生がアウトプットしたものの背後にあるものを読み取る。学生のレポートや発言を丁寧に解釈して「行間」を読むほか、普段から学生をよく観察する。
③のため、講義においては、聞き手の知的好奇心を最も刺激するレベルに話の難易度を合わせる。また、懇切丁寧なまとめを配らず、自ら手を動かしノートを取ることを推奨する。そして、自習用の教材を豊富に提供する。一方、演習や論文指導においては、学生自身の関心のありかと能力を適切に見定め、アドバイスを行う。

４　改善・努力

①について。「正解を求めない」姿勢を持つには少なからず人生経験が要ることを、ここ数年の教育経験で実感した。今後は「無知の知」の意義をより念入りに説明し、学生の批判的精神を養っていく。
②について。学生と直接対話をする機会を積極的に作る。
③について。基礎知識の習得や語学のような特に地道な努力を要する学びへの意欲は、教える側も工夫しなければ、簡単に失われがちであることを痛感している。授業期間内に複数回、復習テストを行うなどして強制的に勉強させることも時には必要だと考え、2024年度は基礎科目で実施した。

５　評価・成果

2024年度の学生へのアンケートでは、授業に対する総合的な満足度は、概ね良好な結果だった。反省点は、全般に自習時間が短かった様子が伺えることである。授業内で自習のための資料を豊富に提示し、意欲をあおって独学する習慣を身に付けさせたい。

６　目標

学問・芸術という分野における探究の楽しさ、人生におけるその意義を学生自身が充分に知ったうえで社会に出ること。そして、卒業後も自力で探究を続けられること。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	音楽情報専修	氏　名	中田　朱美
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
　基礎教養科目：「音楽概論AB」
　　「西洋音楽史概説AB」
　学部必修科目：「音楽情報を発信するⅡ」
　　「専門ゼミⅠⅡ」
　　「専門ゼミⅢⅣ」
　学部選択科目：「室内楽作品研究Ａ」
　　「オペラ史AB」
　　「マネージメント実習Ⅰ」
　　「ピアノ・リテラチュアⅠ」
　大学院科目：「特別総合演習ⅠⅡ」
　　「研究法Ⅰ～Ⅲ」
　　「研究指導Ⅰ～Ⅵ」

相談
　オフィスアワーの対面面談、個人用Google Classroomの開設、授業別Google Classroomの開設、メールやZoomによる論文・ゼミ・学会発表準備指導

高校生への教育
　附属高校生バケーションプログラム「音楽情報講座②」、「出張授業」

初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

２　教育の理念

１）音楽を通じて自己と向き合い、他者とつながり、多様な価値観を理解し受け入れる力を育む。
２）学生が自身の強みを活かしながら、多様な活動に主体的に関わり続けられるよう、専門的な知識や技術、思考力や行動力の習得を支援する。
３）探究心と関心を高め、専門的な問題提起のもと、学術的意義ある研究を実践する。

３　教育の方針・方法

文化・演奏・研究のいずれにせよ、活動を継続していけるよう、各人の価値観と思考力を育てることを重視する。そのために不可欠な、情報の精査・吸収（インプット）と自らの言葉で表現する力（アウトプット）の双方に、根気強く取り組んでもらう。個別対応を大切にしながら、学生たちがそれぞれの初動で路頭に迷わぬよう、まずは各人のペースに併せた対話者となる。

４　改善・努力

１）論文や記事の執筆、研究発表など個別指導を伴う授業では、自らの問いや課題、探究を実現するための方法論を何度となく確認した。かつその方法論が現実的なものかを一緒に検証し、適宜、より適切な方向性を模索した。最終的には、自らが自分の言葉の校閲者となることをめざし、推敲作業を指導した。少しずつ形が結実し始めた段階ではその喜びを分かち合い、日々の成果の蓄積を評価し、最終的な形が整うまで探究を続けられるよう後押しした。
２）大講義となる基礎教養科目では、インプットのために毎授業の冒頭で前回授業の復習テストを行い、基本情報の習得を促した。また時代様式を耳で感じ取るアンテナを立ててもらうために、時代区分を問うリスニング問題をやはり毎授業で実施した。これらと並行し、アウトプットの練習として同テストに記述問題も含め、自らの言葉で論理的にまとめる練習も重ねた。締切後、これらに対するフィードバックを行い、改善点を確認した。

５　評価・成果

【評価】学生に行った授業評価アンケートでは、「授業あたりの予復習時間」を除く全設問平均が4.68であった。これは昨年度を若干上回り、概ね満足している様子が窺えた。ただしやはり今年度も全ての科目で予復習時間を問う設問11が極端に低かったことから、さらなる工夫を要する。
【成果】課題研究報告や博士学位申請論文などの論述にかかわる指導においては、アウトプットとこちらからの批評という対話を可能なかぎり繰り返したこと、毎回の課題を確認したことで、習得していく様子が認められた。当初、論理的な文章を書くことに慣れていなかった学生には、自らの問題意識を自覚してもらうためにブレイン・ストーミングを行ってもらうなど、各人に沿った課題を確認したことで進捗が認められた。

６　目標

学生たちが各科目の課題を日々前向きにこなせるよう、小さな課題や短期的・長期的な目標を都度確認する。
知の探究の奥深さや面白さ、人と共有する素晴らしさを伝えるとともに、学生たちの感性や探究心の良き理解者になる。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	音楽情報専修	**氏　名**	前島　美保
職　位	准教授	**作成日**	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
基礎科目
　　音楽文化論ＡＢ
学科必修科目
　　音楽・学び・情報
音楽情報専修必修科目
　　音楽情報を発信するⅢ
　　音楽情報を読み解くⅣ
　　専門ゼミⅢⅣ
　　卒業研究
　　音楽学入門（オムニバス授業）
　　音楽情報研究法Ⅰ（オムニバス授業）
日本伝統音楽コース科目
　　日本音楽史概説ＡＢ
学部選択科目
　　原書講読（日本語）Ⅰ
　　作品研究Ｅ
学芸員科目
　　楽器学概説Ｃ
大学院科目
　　日本音楽史研究Ａ
　　日本音楽史特講Ａ
　　楽器学研究Ｂ
　　特別総合演習ⅠⅡ
　　テーマ別演習Ⅱ（オムニバス授業）

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
　オフィス・アワー、メール、Zoom等での個人面談

高校生への教育
　オープンキャンパス体験授業、出張授業（長野県立小諸高校）

２　教育の理念

本学の基本理念である「自由、自主、自律の精神を以て良識ある音楽家、教育家を育成し、日本および世界の文化の発展に寄与する」人材の育成に努める。大学院においては、幅広く深く専門的知識を身に付け、自身の研究課題に真摯に向き合いながら尋究することのできる、自立した研究者や指導者を養成する。

３　教育の方針・方法

学生自らが自由に思考し、課題を見つけて取り組みながら成長できるよう、サポートとアドバイスを行う。また、学生との関わり合いの中で、自分自身も教育者として、研究者として研鑽を積み、学生に再びフィードバックできるような循環を生み出す。

４　改善・努力

Google ClassroomやZoomを使った授業運営や個別指導を行い、学生とのコミュニケーションを図るよう努めた。特に時間外であっても、必要に応じて論文指導（学部・大学院）や各種相談に乗るなど、臨機応変に対応した。また、学内の各種リソース（附属図書館、楽器学資料館、音楽資料課、ＩＲ推進室等）を活用した授業運営を積極的に展開した。

５　評価・成果

授業アンケートでは、概ね満足との回答が寄せられている。

６　目標

短期的目標：学生の心身の健康に留意しながら、興味関心を広げ、主体的に学ぶことのできる環境づくりや授業運営に努める。大学院で研究を志した学生が、自立して継続的に研究活動に邁進できるように、サポートする。
長期的目標：音楽情報専修や大学院での学びを活かし、将来的に多様な音楽の現場や幅広い社会で貢献できる人を育成するため、授業内容の充実を目指す。また自身としても、未来の音楽文化と学術研究の発展、そしてより良い世界の実現につながるような責任ある行動を心掛ける。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	音楽情報専修	氏　名	三浦　雅展
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）

学部　共通科目：「AI・データサイエンス」
教養科目：「音の科学AB」
「メディアリテラシー入門／音楽データサイエンス入門」
学芸員科目：「楽器・音響講義ⅠⅡ」
「楽器学概説AB」
必修科目：「専門ゼミⅢⅣ」
「卒業研究」
選択科目：「音楽情報研究講義（楽器・音響）AB」
「音楽情報を発信するⅣ」
「音楽情報の編集・加工Ⅱ・B」
ピアノ調律コース科目：「鍵盤楽器概論Ⅱ」

大学院科目：「研究法ⅠⅡⅢ」
「楽器・音響演習ⅠⅡⅢⅣ」
「楽器学研究A」
「楽器音響学研究AB（音楽音響学特講AB）」
「演奏科学研究ⅠⅡ」
「研究指導ⅠⅡⅢⅣⅥ」
「器楽領域研究ⅠⅡⅢⅣ」
「音楽音響学特講AB」

相談

オフィス・アワー，Slack等のSNS，メールによる相談

２　教育の理念

１）音楽文化教育を学ぶ学生だけでなく音楽の演奏・創作を志す学生が音響学や楽器学を通して音と音楽に対する科学的な視点を身に付ける。
２）数理データサイエンス分野の基礎と応用を音楽分野の事例によって身に付ける。
３）大学院の修士課程の学生が学術学会での研究発表を通して自律的に科学的研究を発案し，実施することができる。
４）大学院の博士後期課程の学生は，科学的な視点を世に広めることができ，社会に責任ある研究者として活躍し，高度な教育を実施できるとともに，科学的な音楽学の研究を実施できる能力を身に付ける。

３　教育の方針・方法

1)　音楽文化教育を学ぶ学生だけでなく音楽の演奏・創作を志す学生が音響学や楽器学を通して音と音楽に対する科学的な視点を身に付けるために，音楽の科学的・客観的な視点を身に付けるための訓練として，音響学による視野を持つことのできるような授業を実施する。例えば音響波形の表示とその意味が理解できるようになる。
2)　数理データサイエンス分野の基礎と応用を音楽分野の事例によって身に付けるために，音楽の分析方法とその結果をデータで示し，統計的仮説検定の視点で分析し，その結果を理解することで対象を理解できるようになる。さらに音楽的視点から考察できるようになり，その結果を他者に説明できるようになる。
3)　大学院の修士課程の学生が学術学会での研究発表を通して自律的に科学的研究を発案し，実施することができるために，学内外の学術会議に出席し，討論に参加する。また自らの研究を発案し，独力で実験や実装を行い，分析を通して，その結果を学術会議で発表できるように指導する。
4)　大学院の博士後期課程の学生は，科学的な視点を世に広めることができ，社会に責任ある研究者として活躍し，高度な教育を実施できるとともに，科学的な音楽学の研究を実施できる能力を身に付けるために，国内外の学術会議へ参加し，自らの考案し実施した研究内容を日本語だけでなく英語で発表できるように指導する。さらに査読付き学術論文誌に投稿し，採録されるまでの指導を行う。また外部資金を自ら獲得できるように，各種助成金への投稿を指導する。

４　改善・努力

・学部での授業では，すべての授業において，Google Classroomでの資料と課題の配布を行い，課題については全ての会に対して点数のフィードバックを行った。また学生からの毎回の質問は授業の最初にまとめて全学生に
フィードバックをした。
・卒業論文，修士課程，博士後期課程の学生に対しては，Slackを用いた情報交換を行い，迅速な指導を実現した。またGoogle Driveを用いた研究資料の共有，Zoomを使った遠隔での指導やゼミを実施した。

５　評価・成果

2024年度後期終了後に自主的に行った全授業に対する授業アンケートの結果を示す。全受講者数を母数とした場合の回収率は77%(47/61)であった。調査の結果，授業の内容に対する満足度を5段階で評価した結果，内容に対する満足度は5段階評価換算で平均4.40であった（1が低い，5が高い）。また課題の量については3.30（1が多い，5が少ない）であり，あまり負担ではないように見受けられた。さらに授業の難易度は2.04（1が難しい，5が簡単）であった。しかし，「この授業の履修を友人や後輩に勧めますか？」の問いには，「強く勧める」「どちらかというと勧める」「どちらかというと勧めない」「全く勧めない」の回答に対し，83%の学生が「強く勧める」「どちらかというと勧める」に回答した。このように授業の内容が難しく，課題の量は中庸であり，満足度が高く，友人や後輩に履修を勧めるという結果となり，受講生によい授業効果が実現できたと考えている。
今年度から新たに開始したAI・データサイエンスについては，動画の視聴率が低い受講生が多いため，結果的に落第になるケースが前期に多く見られた。後期では概ね大部分の学生が受講を完了することができた。

６　目標
・短期的目標：受講者の満足度を持続させる。課題の内容を精査し，実施すべき量を調整する。 ・中長期的目標：演奏・創作を身に着けた学生が社会で音楽人として活躍し，教育現場での利用や音楽データサイエンス分野の民間企業や，音楽出版系，音楽マネージメント系の企業にて科学的視野を持った音楽人として活躍できる。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	幼児音楽教育運営会	氏　名	林　浩子
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
【学部】
　教養科目
　　「就職・結婚・子育て」
　教職科目
　　「教育実習Ⅱ」
　　「教職実践演習（幼稚園）」
　幼児音楽教育専攻必修科目
　　「幼児教育講義（教職概論）」
　　「幼児教育講義（保育原理）」
　　「専門ゼミⅠⅡ」
　　「幼児と人間関係」
　　「保育内容「人間関係」の指導法」
　　「幼児教育方法論」
　　「幼児理解と教育相談」
　　「幼児教育の体験活動B」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ」

相談
　オフィスアワー、メールによる相談

高校生への教育
　オープンキャンパス、進学ガイダンス、附属高校集中講座

２　教育の理念

(1)幼児や幼児教育に関する幅広い知識や技能など、専門的知識を身につける。
(2)幼稚園や地域社会の中で信頼関係と協働性を創り出していくコミュニケーション力を身につける。

3　教育の方針・方法

(1) 幼児や幼児教育に関する幅広い知識や技能など、専門的知識を身につけるために、
①幼児を取り巻く社会の動向や流れを理解し、幼児教育の意義と意味を理解する。
②幼児の発達や援助を捉えていくための理論と実践事例を分かりやすく提示する。
③実践事例は、具体的な幼児の姿や幼児教育の現場の記録や映像を活用する。
④附属幼稚園と連携して見学や観察の機会を持ち、実習以外の教科でも理論と実践の往復を目指す。
など、実践的な学びへつなげていく。

(2)幼稚園や地域社会の中で信頼関係と協働性を創り出していくコミュニケーション力を身につけるために、
①個々の問いや考えを互いにディスカッションしながら、学生自身が主体的に学びを進めていく。
②グループで課題に取り組み、計画、実践、振り返りを行う中で、学生同士が互いの考えの違いや良さを認め合う場や機会を持つ。
③グループで取り組んだ課題や学びを発表し合う場を通して、グループディスカッションの仕方や方法やICT機器の効果的な使用法を学ぶ。

4　改善・努力

・全科目でGoogle Classroomを設定し、毎時間、資料と課題を提供するとともに、課題提出へのフィードバックを行った。また、学生が作成した動画や作品などを授業内で学生同士が見合い意見交換を行うなど、Google Classroomを効果的に活用した。
・「教育実習Ⅱ」や「幼児教育の体験活動」の授業以外にも、附属幼稚園との連携を積極的に行い、保育現場で学生が子どもとの関わりを深め、教師の援助の方法を現場で学べる機会を増やした。
・ZOOMを活用して授業内容の質問に応えたり、指導を行ったり個別対応に努めた。
・専攻外で保育士資格取得を希望する学生の相談や指導を行った。

5　評価・成果

・授業アンケートで「おおむね満足している」との結果が寄せられている。
（資料２：授業アンケート結果）

6　目標

短期的目標：学生が興味と意欲を持って主体的に学び、実践的な学びに繋がっていけるような授業展開を工夫する。
中長期的目標：音楽大学で幼児や幼児教育の専門的知識を得た学生が、様々な場面で自分の力を発揮し社会に貢献できる幼児教育者の育成に努める。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	幼児音楽教育専攻	氏　名	八幡　眞由美
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
【教養科目】
　人間と環境Ａ・Ｂ
　社会と福祉Ａ・Ｂ
【共通科目】
　児童文学Ａ・Ｂ
【幼児音楽教育専修必修科目】
　幼児と環境
　保育内容「環境」の指導法
　幼児と言葉
　保育内容「言葉」の指導法
　幼児教育課程論
　幼児教育講義（幼稚園の運営）
　教育実習Ⅰ
　専門ゼミⅠ・Ⅱ
初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ」
保育士試験対策講座
　子ども家庭福祉、言葉
相談
　オフィスアワー、メールによる相談
高校生への教育
　音楽文化教育講座（附属高校）

２　教育の理念

(1)多様化する社会や文化に興味や関心を持ち、幅広い教養を身につける。
(2)幼児教育に関する専門的な知識を身につけるとともに、コミュニケーション能力を育む。

３　教育の方針・方法

(1)多様化する社会や文化に興味や関心を持ち、幅広い教養を身につけるために
・多様化する社会や文化について、社会問題や児童福祉、生活や環境、災害等の様々な視点から検討する。
・社会人として求められる幅広い教養を身につけられるようにする。
(2)幼児教育に関する専門的な知識を身につけるとともに、コミュニケーション能力を育むために

・知識だけでなく、実践的な学びを取り入れる。
・実際の保育現場を想定し、子どもの理解に基づいた計画を立てることができるように支援する。
・グループワークや対話を大切にし、幼児教育者として求められるコミュニケーション能力を養う。
・教育実習での学びをフィードバックし、実践と大学での学びを結びつける。

４　改善・努力

・毎時間コメントカードを提出してもらい、授業内容の整理と知識の確認を行うとともに、学生からの疑問や要望を吸い上げ、次からの授業に活かしている。
・Google Classroomを活用し、資料の配布を実施したり、学生からの質問等に対応している。課題はフィードバックを実施し、各自の学びの確認と気付きを大切にしている。
・教養科目では、時事的な話題やニュース等を取り上げ、学生が興味や関心を持てるようなトピックを取り上げている。実生活で役立つ内容、教員を目指す学生が教員となった時に活用できるような内容を取り入れている。また、各省庁や自治体の資料等を活用することにより、現状を把握できるようにしている。
・専門科目では、学生が主体的に授業に取り組むことができるようにグループワーク等を取り入れている。
・時間外で保育士を目指す学生の相談や指導等を行っている。

５　評価・成果

概ね満足しているという授業アンケートが寄せられている。
（資料２：授業アンケート結果）

６　目標

・短期的目標
　FD研修等で接獻欷的に授業実践の情報交換をして学び合い、授業改善を図る。よりわかりやすい授業となるように教材研究等を行うとともに、授業アンケートの感想や要望を活かし対応する。
・中長期的目標
　幼児音楽教育専攻の卒業生が「音楽と幼児教育のスペシャリスト」として活躍できるよう、主体的な学びができる授業改善を継続していく。
　教養科目受講生が多様化する社会や文化に興味や関心を持ち、幅広い教養を身につけられるよう授業改善を継続していく。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	幼児音楽教育	**氏　名**	伊藤　仁美（いとう　さとみ）
職　位	准教授	**作成日**	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
【学部】
<u>幼教必修科目</u>
　「音楽教育演習（即興演奏法）Ⅰ、Ⅱ」
　「幼児音楽教育講義Ａ」
　「幼児と表現Ａ」
　「保育内容表現の指導法」
　「表現教育Ｄ」
　「専門ゼミⅠ、Ⅱ」
　「音楽教育演習（リトミック）Ⅱ」
<u>幼教選択科目</u>
　「幼児教育研究」
<u>幼児音楽指導者コース必修科目</u>
　「幼児音楽指導研究Ⅰ、Ⅱ」
　「幼児音楽課題研究Ⅰ、Ⅱ」

【大学院】
　「音楽教育実践演習Ａ、Ｂ」
　「音楽教育学研究」

<u>初年次教育・専門課程開始時教育</u>
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

<u>相談</u>
　　オフィスアワー、メール

<u>高校生への教育</u>
　　音楽文化教育講座（附属高）

【その他】
　　出張体験授業「幼児と音楽」、
　　オープンキャンパス体験授業「幼児のリトミック」等

２　教育の理念

(1)音楽の専門性を持った心豊かな幼児教育者としての力をつける。
(2)幼児教育における音楽の表現活動を実践的に学び、展開できる。
(3)大学院音楽教育学専攻生は、今日的課題や音楽教育の多様性と広がりを探究し、自身の研究テーマを深耕する。

３　教育の方針・方法

(1)音楽の専門性を持った心豊かな幼児教育者としての力をつけるために。
①幼児と音楽の関わりについて様々な観点から検討する。様々な観点とは、幼児を取り巻く環境、音楽発達、表出と表現等、である。
②幼児は生活や遊びの中で様々な音、音楽に出会い、楽しみ、深めていく。このことが分かる具体事例を複数示して授業を進める。
(2)幼児教育における音楽の表現活動を実践的に学び、展開できるために。
①幼児の音楽表現活動を豊かなものにする上で、保育者の役割は重要である。そのために音楽表現活動の指導案を作成し、保育者役と幼児役に分かれて模擬保育を行う。
②幼児の音楽的活動として「聴く・歌う・動く・奏でる・つくる」の５つの活動を具体的に学ぶ。その上でこれらの体験が互いに連携し合いながら総合的に展開される視座を高める。
③附属幼稚園と連携を取りながら、観察や実践を通して幼児の音楽表現の実際を学ぶ。
(3)大学院音楽教育学専攻生は、今日的課題や音楽教育の多様性と広がりを探究し自身の研究テーマを深耕するために。
①音楽教育研究の目的・方法・フィールドと実際について国内外の文献講読やディスカッションを通して理解が深まるような授業を行う。
②学術研究誌への論文投稿および学会発表を促し、そこで得た示唆を自身の修士　論文作成に活かしていけるよう指導する。

４　改善・努力

(1) Google Classroomの活用：対面授業であっても必ずGoogle Classroomを設定し、配布資料の投稿、学生からの質問等に対応した。
(2)授業外の相談：専攻外の学生からの相談は主にメールで対応し、必要に応じて面談を設けた。
(3)zoomを活用した指導：修士論文指導や大学院進学に関する相談等は学生の希望を優先しながら、zoomによる指導を行うこともあった。

５　評価・成果

2024年度前期の授業に関するアンケート結果の一部を以下に示す。（資料２）
(1)音楽教育演習（即興演奏法）Ⅱ：項目６「授業内容」に関しては5.0ポイント（有効回答４）
(2)リトミックⅡ：項目６「授業内容」に関しては4.67ポイント（有効回答３）
授業評価は概ね良好であった。

６　目標
(1)短期的目標：音楽と幼児教育を楽しく主体的にかつ、表現豊かに学ぶことのできる授業展開に努める。また、幼稚園教諭を志望する学生の就職率100％の実績を保つ。 (2)長期的目標：現場において高い音楽性と豊かな表現力を備えていることは大きな“強み”である。幼児の人格形成に携わる重要な役割を担っていることを理解し、希望するフィールド（幼稚園、保育園、音楽教室等）で十分に力を発揮できる幼児音楽教育者の育成に努める。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	外国語教育運営会	氏　名	末松　淑美
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
　基礎科目「外国語コミュニケーション（ドイツ語）Ⅰ，Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
　共通選択科目「ドイツ語初級（会話）AB」

初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談
　オフィスアワー、メール等による

２　教育の理念

１）学部生・大学院生が、ドイツ語の基礎語彙と文法の基本を身につけ、辞書を正しく使ってドイツ語を理解・発信できる力をつける。
２）新入生が自分と音楽について言葉で発信する力をつける。３年生が自分と音楽について、第三者に伝わるような文章を書く力を付ける。
３）学部生・大学院生が、目的に応じて適切な学習方法および情報を知ることができ、自らを成長させることができる。

３　教育の方針・方法

１）学部生が、ドイツ語の基礎語彙と文法の基本を身につけ、辞書を正しく使って、ドイツ語を理解・発信できる力を付けるために。

- 「聞く・話す・読む・書く」練習をバランス良く授業に取り入れる。言葉はその音・文字・意味が一体化してはじめて使えるようになるからである。
- 学生のドイツ語の発信に対して、こまめにフィードバックする。人は間違えながら学ぶものである。
- コミュニケーションには、その言語を話す人々の文化に関する知識が欠かせない。教員からの情報・映像提供だけではなく、学生による調べ学習とプレゼンテーションを通して、楽しく学び合える場を作る。

２）新入生が自分と音楽についてことばで発信する力を付け、３年生が自分と音楽について、第三者に伝わる客観的な文章を書く力をつけるために。

- 感情を言葉にするトレーニングとして、クラスメートとの意見交換を促し、主観的なことを客観的に伝える方法を学生が自ら見つけられるようにする。
- 卒業後も社会で通用する文章が書けるように、ワークシート等を用いて一般的な「論述の形式」をしっかり理解し、記憶してもらえるように心がける。

３）学部生・大学院生が、目的に応じて、適切な学習方法および情報を知ることができるために。

- 初心者から上級者まで、学部生・大学院生のさまざまなドイツ語学習目的および語学レベルに対応できるように、研究室に参考図書や学習書を揃えて、指導を工夫する。デジタル情報についても、常に目配りをする。
- 可能な限り附属図書館の外国語コーナーやスタディールームにも学習書を整備してもらい、学生が自立的に学べる環境に気を配る。

４　改善・努力

- 引き続きGoogle Classroomを利用し、学生が自ら自己チェックをしたり、自らより多くを学ぼうとする意欲をサポートする。
- 授業アンケートの中に、「後期になると内容が難しくなり大変だった」というコメントがあった。これまで以上に、視覚的にも聴覚的にも分かりやすい説明と資料作りを心がけたい。

５　評価・成果

概ね満足しているとの授業アンケートの結果が寄せられている。
（資料２：授業アンケート結果）

６　目標

- 短期的目標：FD研修などで積極的に授業実践の情報交換をして学び合い、授業改善を図る。教材研究を欠かさず続け、より楽しく分かりやすい授業の工夫に役立てる。
- 長期的目標：ドイツ語を通して学んだ知識を音楽文化活動に生かしてもらうために、語句の表面的な意味だけでなく、その背景にある文化的文脈も含めて読み込めるような教材や授業案を考え、実践する。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	外国語教育運営会	**氏　名**	宮谷　尚実
職　位	教授	**作成日**	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
学部
基礎科目：「外国語コミュニケーション（ドイツ語）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
共通選択科目：「ドイツ語文法上級A、B／ドイツ語上級（文法）A、B」
教養科目：「ヨーロッパの文学／文学 C、D」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅡ」

相談
オフィスアワー（対面・Zoom）、メール、その他学生の希望に対応

高校生への教育
（今年度は該当なし）

課外指導
・ドイツ語スピーチ、ドイツ語圏での語学講習や留学準備
・ドイツでの演奏・研修旅行（2025年2月20日～28日）

２　教育の理念

１）音楽を学ぶ学生たちが言語を通して自分を表現する力をつける。
２）音楽を学ぶ学生たちが言語を通して他者や異文化を理解しようとする力をつける。
３）音楽を学ぶ学生たちが広い視野と深い思考、さらには多様性に対応できるしなやかで自由な精神を身につけるための基礎づくりをする。

３　教育の方針・方法

１）音楽を学ぶ学生たちが言語を通して自分を表現する力をつけるために
・初年次教育や教養科目でレポート作成の指導を丁寧に行う。
・外国語授業における言語コミュニケーションを、授業内アクティヴィティなどを通じて多方面から促進する。
・初年次教育、外国語授業、講義科目、いずれにおいても、ペアあるいはグループ単位での意見のシェアやディスカッションを重視する。
２）音楽を学ぶ学生たちが言語を通して他者や異文化を理解しようとする力をつけるために
・文学作品や文献への関心を高め、読み解く力を向上させるような授業や講義を行う。
・国際交流の機会を授業の内外を問わず積極的に作る。

・海外や異文化への関心を高めるような授業や講義のコンテンツを充実させる。
３）音楽を学ぶ学生たちが広い視野と深い思考、さらには自由かつ寛容な精神を身につけるための基礎づくりをするために
・音楽とその他の領域を連携させるための教育コンテンツを充実させる。
・多文化社会における思考の多様性を学生自らが体験でき、国際性を身につける機会を積極的に作る。
・現代社会や自文化への関心を高め、同時にそうした身近なものを外からの視点で批判的にも見ることができる機会を作る。

４　改善・努力

・Google Classroomを全科目で活用し、情報共有のみならず、アクティブ・ラーニングやピア・ラーニング、あるいは反転授業のツールとしている。
・反転授業のため、10分程度で視聴可能な動画を学生の理解度や進度に対応して毎週配信し、学生たちの利用の便宜のためにYou Tubeにアップロードしている。
・対面で行う授業、特に少人数クラスでは学生同士の対話が円滑にできるような工夫を継続し、それぞれのクラスや学生の特性に応じて授業改善の努力を重ねている。
・ドイツとの交流を継続して行っている。例：ドイツ語圏出身の元留学生によるオリジナル映像を通しての交流。Zoom等のオンラインビデオ会議システムを活用したドイツとの交流会の実施。
・日本の楽曲をドイツ語と映像でプレゼンテーションするプロジェクトの15周年記念として、有志学生とのドイツでの演奏会および現地学生との交流会を実施した。今回の成果を学術的に分析し、今後のドイツ語教育および教養教育に還元する努力を重ねる。
・教員と学生との信頼にもとづく協働関係を構築するため、提出物へのフィードバックを迅速かつ丁寧に行っている。提出物の返却時にひとりひとりの学生の様子を見て、必要に応じた声がけを行っている。
・教養科目では、毎回の講義へのコメントは可能な限り多く抜粋し、コメントやアドバイスをつけて次の回までにGoogle Classroom経由で全員にフィードバックしている。講義内容の確認や相互の知的刺激になっている。

５　評価・成果

・授業アンケートにおける学生の授業への満足度は概ね高い。その一方で、学生自身の取り組みに関する自己評価が例年通り低い傾向にあるので、モチベーションを上げるのみならず、学習に関する自己肯定感の向上を目指す取り組みを引き続き意識する必要がある。（資料２　授業アンケート結果）
・授業だけでなく、スピーチコンテストへの参加や成果、日本の楽曲プレゼンテーション映像による国際交流、外部奨学金による短期語学留学の経験など、在学中の学びが大学院進学や留学やその後の人生に役立っているという声が卒業生から引き続き寄せられている。（個人的に寄せられた感想のため、エビデンスの公表なし。）
・2024年度にも、スピーチ指導が大きな成果を挙げた。（資料３　スピーチコンテスト結果リスト）
・ドイツ、ミュンヘンおよびテュービンゲンでの演奏・研修旅行（2025年2月20日～28日）では、今村央子先生による《枕草子組曲》のドイツ初演が実現した。現地学生とのドイツ語と音楽を通しての交流を実施し、現地でも非常に好評だった。（資料４　現地新聞のコンサート評）

６　目標

・短期的目標：毎回の授業で常に授業改善を行う。学内やTAC内のFD研修はもちろん、国内外の教育関係研修や教育学会で積極的に最新の情報を得るように努め、自らの授業の実践報告も積極的に発信し続ける。
・中長期的目標：授業を通じた国際交流の可能性をさらに模索する。教養科目については、その年度の学生たちの関心や状況に柔軟に対応できるようにコンテンツとスキルの向上を常に行う。学生たちの専門である音楽の学びと外国語学習や教養科目との連携をさらに目指す。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf
（資料３）過去のスピーチコンテストの結果一覧
https://sites.google.com/a/kunitachi.ac.jp/treffpunkt/
（資料４）Schwäbisches Tagblatt（シュヴァーベン日報）2025年2月27日付記事（紙媒体20ページ）
https://www.pressreader.com/germany/schwabisches-tagblatt-tubinger-chronik/20250227/282351160519137?srsltid=AfmBOorGPuhUZkJUXyhL4WzfPXeP90sbWo_J6KmOyBz2BxdoJcGytZCJ

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	外国語教育運営会	氏　名	大和久　吏恵
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

1　教育の責任

担当科目（資料１）
学部　基礎科目：「外国語コミュニケーション（英語）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」
　　共通選択科目：「総合英語EF/英語上級（進学）AB」

初年次教育・専門課程開始時教育
「基礎ゼミⅠ」

相談
オフィス・アワー、メールによる相談

高校生への教育

2　教育の理念

１）学生が英語の基礎を習得し、英語を理解する力を付ける。
２）学生が英語の４技能を身につけ、自分の意見を発信する力を付ける。
３）選択科目を履修した学生が、より高度な読解技術を身に付け、目的に応じた英語学習を継続できる。

3　教育の方針・方法

１）学生が英語の基礎を習得し、英語を理解する力を付けるために、
　①高校までの既習文法を復習する時間を設け、学びが定着したかチェックする。
　②語彙の復習や増強をはかるために、発音練習や類似文の作成を行う。
２）学生が英語の４技能を身につけ、自分の意見を発信する力を付けるために、
　①「読む・聞く」活動を通して英語をインプットする、自分の意見をまとめる。クラスメートの（ビデオ）・プレゼンテーションを視聴して、内容を理解しフィードバックを行う。
　②「書く・話す」活動を通して英語をアウトプットする、自分の意見を伝える。クラスメートに（ビデオ）・プレゼンテーションを視聴してもらい、収集したフィードバックを参考に、今後のプレゼンテーションに役立てる。
３）選択科目を履修した学生が、より高度な読解技術を身に付け、目的に応じた英語学習を継続できるために、
　①論理的な文章を精読する。指示語に注意することで「なんとなく」ではなく「確実に」英文を理解できるようにする。
　②学生の目的に沿った教材を使用し、英語を通して知識や異文化理解の向上を図る。
　③学生の目的に沿い、授業外でも行える学習方法を教授する。

4　改善・努力

・Google Classroomを活用し、個人のペースに応じた学習を継続させ、進捗状況をチェックした。
・Google Formsで学びの定着をはかる際には、メッセージをつけフィードバックを行うことで、学習へのモチベーションを持続させるようにした。
・プレゼンテーションの評価を学生同士で行うことにより、英語をわかりやすく伝えるように発信する力を、そして英語を注意深く聞き理解する力を付けられるようにした。
・Self-Reflection File Activity を導入し、授業理解をチェックするほか課題提出の有無や出席回数も、各学生が一目でわかるようにした。
・大学院入試過去問題や公務員試験の過去問題を使用するなど、学生の目的に沿うことで、難易度の高い英文でも解読する意欲を失わないようにした。

5　評価・成果

・概ね満足しているとの授業アンケートの結果が寄せられている。
（資料２：授業アンケート結果）

6　目標

・短期的目標：定期的なFD研修などで積極的に実践発表を行い、授業運営に関する情報交換を行うことで、他教師と学び合い、授業改善を図る。継続して教材研究を行うことで、学生が理解しやすい授業を行う。
・中長期的目標：学生が英語を通して音楽活動の幅を拡げられるよう、英語教員としてサポートする。短期・長期留学を考えている学生、資格取得を考えている学生のニーズに沿うよう、教材や授業案を工夫する。

7　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	外国語教育運営会	氏　名	松岡　新一郎
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

1　教育の責任

担当科目

外国語コミュニケーション（フランス語）
建築の世界
絵画の世界
論理学入門
現代哲学入門
ヨーロッパ古典文学

初年次教育・専門課程開始時教育

「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

2　教育の理念

人の思考の基盤をなす言語の基礎をしっかりと身に付けることは、コミュニケーション能力のみならず、思考の幅を広げ、知的な成長のためには欠かせない。古典的な教養を学ぶことで、長い間受け継がれてきた学問に連なるきっかけを得る第一歩となる。

3　教育の方針・方法

フランス語という17世紀に大きな改革がなされ、外交言語として厳密に練り上げられた言語を習得するにあたっては文法構造の十全な理解が求められよう。一年次にフランス語文法の全体を紹介し、二年次以降、話す、書く、読むことを通じて肉付けを行うことで、緻密に練り上げられた言語とその背景となる思考に触れることが可能となる。

4　改善・努力

学生アンケートは外国語コミュニケーション、一般教養いずれにおいても全く同じ内容で、予習、復習が充分になされていないと見受けられる。授業内で提示される情報量は本学学生には厳しすぎると思われるくらい多く、出来れば授業内で示されたことを整理し、次に臨むような努力を期待したいが、個人やアンサンブルのレッスンに常に追われている本学学生に多くを課すのは困難かもしれない。さらなる工夫が必要となろう。

5　評価・成果

実用性にとらわれず、また近年の学生に顕著な、座学への抵抗感にも関わらず、教員が自ら体験してきた学問の経験をどうにかこうにか最後まで実践できたことは成果と考える。

６　目標
若い世代の学力低下は、本国のみならず、西欧諸国でも問題となっている。幸運にも大変恵まれた環境で大学、大学院、留学生活を送ることが出来、非常に優れた先達の導きを得ることができた世代として、それを次の世代にしっかり受け継ぐことが課せられよう。 様々な困難が予想されるが、妥協することなく、「教養教育」を実践していきたいと考える。
７　エビデンス
（資料１）各科目のシラバス検索画面 http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on （資料２）本学授業アンケート結果 https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	外国語教育運営会	氏　名	レバリアーティ・ガブリエレ Rebagliati Gabriele
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
　学部　　基礎科目:「外国語コミュニケーション（イタリア語 Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）
　　共通選択科目:「イタリア語上級（文法）AB」
　　「イタリア語中級 AB」
　　「イタリア語初級 AB」
初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ」

相談
オフィスアワー、メールによる相談など

高校生への教育
該当なし

２　教育の理念

外国語の勉強は、人間を豊かにするものと考える。例えば、イタリア語の学習には、文法や発音などだけではなく、イタリア社会に目を向け、いかに言語と社会の間に相互作用が行われているかを調べることも必要になってくる。言葉を覚えることによって、その国の文化・慣習についての知識を得、その社会に対する理解力が深まる。つまり、イタリア語を習うことによって、学習者は人間としても成長し、想像力を身につけることができる。
私は、イタリア語の教師として、ただ単に外国語を教えるだけではなく、学習者に新しい文化や価値観などを伝えることも大変重要な役割と認識している。

３　教育の方針・方法

15年間、日本人学生の学習方法の問題点、強み、傾向などを考察してきた。その結果、言語学または外国語を専門にしない学習者の興味関心を得るより適した外国語教育方法はいかなるものかと自問してきた。特に音楽のように、クリエイティブな分野で活躍する学生にとっては、より実用的な外国語教育方法の必要性を毎日の仕事の中から実感した。
加えて、教育者はグローバル社会、AIの発達などの競争が激しい社会において今後活躍する音楽プロを育成する責任があると思われる。言うまでもなく、外国語の習得もプロにとって必須なスキルの一つである。
したがって、メディアクリエーターや絵本作家として積んだ経験を活かし、ゲーム式の授業を実践する。それにより、学習者が授業を楽しみ、クラスの他の学習者と協力・共同作

業を通じて学習する。これにより、詰め込み式の教育ではなく、学習者の能動的な授業参画を促すことができている。尚、上級レベルの学習者に対してイタリア語を使用し、プロジェクトに取り組み、何かを実現するというプロジェクト・ベースド・ラーニング学習方法を実践する。

４　改善・努力

授業以外の場で（オフィスアワー、メールでのやりとり）学生との理解を深め、彼らのニーズにさらに相応しい授業内容と進め方に努めたい。さらにペアになっている先生と授業の進歩について話し合い、次の時に新しい内容に直接に入らずにしっかりと学生と前の授業の内容を徹底的に復習するコーナーを授業に設けたいと思う。具体的に前回の授業で習ったことを取り上げ、その内容を使った学生同士で質問し合うことで身についたかどうかを確認する。

５　評価・成果

アンケートの結果から窺えるように、イタリア語の授業に対する学生の満足感と興味を得られたと思う。オフィスアワーに通っていただいた学生の数からもイタリア語に対しての関心が高まった傾向も見られる。さらに独自のキャリアのために能動的にイタリア語を利用したいと思う学生の姿も現れたので、今度こそ去年と同じようにイタリア語教授の仕事と学生をサポートする仕事に取り組んでいきたい。

６　目標

大学で活躍している先生または在学している学生と組み、それぞれの専門を横断するプロジェクトを実現することにより、視野を広げ、国際交流やクリエイティブな活動を育てる大学の構築に貢献していきたい。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusReferenceContentsInit.do;jsessionid=NE1c1tauF2TBixdL8_DpLTqr0jeLZsBuADx4C0nH?subjectId=026200000636&formatCode=1&rowIndex=0&jikanwariSchoolYear=2024
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf
（資料３）研究の成果の一部
Rebagliati, G. “ Per un approccio creativo all’insegnamento della grammatica italiana”,La lingua italiana in Giappone, 2010,165-178.

2024年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	教職課程運営会	氏　名	布村　育子
職　位	教授	作成日	2025年3月31日

1　教育の責任

担当科目（資料１）
　教職科目
　　「教育課程概説」
　　「生徒指導・進路指導」
　　「教育実習AB」
　　「教職実践演習（中・高）」
　学校教育必修科目
　　「専門ゼミⅠ」

初年次教育・専門課程開始時教育
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」

相談・個別指導
　オフィス・アワーを中心に、学生が希望する時間を調整し相談と個別指導に応じる。メールでの相談に応じる。

教員採用試験対策
　教職特別講座、夏季休業中の二次試験対策を行う。

2　教育の理念

１）本学の教育理念を踏まえ、教職課程の教員であるという自覚を持ち「良識ある教育家」を育成する。
２）自らの研究を教育に生かし、学問の真理に基づいた質の高い教育を実践する。

3　教育の方針・方法

１）「良識ある教育家」を育成するための教育方針・方法
　①教育を、自身の経験以外から学術的に捉える力を身につける。
　②教育を、法令・歴史・海外の教育といった幅広い視野から考察し、学んだ内容を自分の言葉で説明できる力を身につける。
　③教育研究の最前線の内容と教育現場とを関連付けられる力を身につける。
　　→①②③のために、理解につながる効果的な教育事例や文献等を適宜学生に紹介し、論点を明確にした授業を展開する。
２）「質の高い教育」を実践するための教育方針・方法
　①教員を目指す学生が、理想とする教師像を明確にし、理想に向けて何をすべきかを理解できるようにする。

②教員を目指す学生が、教育を通して育てたい人間像を明確にし、そのために何をすべきかを理解できるようにする。

→①②のために、何のために何を学んでいるのかを、学生自身が意識できるような問いかけを行い、主体的に学ぼうとする姿勢を育む授業を展開する。

4　改善・努力

・すべての科目で Google Classroom を活用し、資料等を共有できるようにした。
・教員採用における最新の情報を得て、学生に還元できるように努めた。
・教育関係の学会での発表や情報交換、学会誌への論文投稿を通して、自らの知識を鍛え、学生に還元できるように努めた。
・教員採用試験二次試験対策では、希望する学生にzoomで面接対策ができるように設定した。
・教職課程運営会の教員間で連携をとり、協力しながら教職課程の運営を進めた。

5　評価・成果

・授業アンケートでは概ね良い評価を得られた。
・学生が、積極的に発言できるような機会を設けた。
・期末試験の結果では、こちらが想定していたよりも平均点が低かった。理解すべき内容をもう少し焦点化させて説明する必要がある。

6　目標

・短期的目標：毎回の授業時間に学生自身が「何を学んだのか」を実感できる授業を行う。そのために効果的な教材を準備する。
・中長期的目標：教育学の知見が卒業後の生活とどう関係しているのかを学生自らが考察できるとともに、大学で学んだ知識を社会貢献につなげられるようにする。そのために、多角的な視点から授業を構成する。

7　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf

2023年度　ティーチング・ポートフォリオ

所　属	教職科目	氏　名	山本　智子
職　位	准教授	作成日	2025年3月31日

１　教育の責任

担当科目（資料１）
<u>初年次教育・専門課程開始時教育</u>
　「基礎ゼミⅠ、Ⅱ」
<u>教職必修科目</u>
　「特別支援教育（中高）」
　「教職実践演習（中高）」
　「特別支援教育とその方法（幼）」
　「幼児と健康（幼）」
<u>教養科目</u>
　「青年の発達と心理」
　「老年期の発達と心理」
　「身体の健康A」
　「身体の健康B」
　「仕事と人生（キャリア発達）」

２　教育の理念

（１）子どもと教育および音楽に関する基本的な知識や技能を習得し実践に活用することができる教員を養成する。
（２）教養および専門科目の履修を通して学士としての基本的な知識および技能を習得した社会人を養成する。
（３）課題を発見し探究を通して社会の発展に貢献することができる基本的な力の習得を支援する。

３　教育の方針・方法

（１）乳幼児期から青年期にわたる教育者として活躍できるように、子ども（学習者）の理解に関わる教育を実施する。
（２）身体と精神および環境との関係を踏まえて、人を理解し支援することに関わる教育を実施する。
（３）与えられた課題を解決するとともに、課題を見出して解決する力の習得に関わる教育を実施する。

４　改善・努力

（１）授業ごとに履修生の学習の習得に関わる内容や程度を確認し、以後の授業の内容や方法に反映している。
（２）授業アンケートの結果に基づいた省察の過程や成果を今後の授業の内容および方法に活用している。
（３）学習の効果や履修生の状況に応じてオンライン授業に対応している。

５　評価・成果

（１）授業後に実施する学習された内容の程度や内容の確認の過程で授業ごとの教育目標を達成している。
（２）授業を履修する学生のほとんどが学習の到達水準を満たし単位を修得している。
（３）授業アンケートにおいて、概ね良好な回答を得ている。

６　目標

教育者を志望する履修生の希望に応える授業の内容や水準を確保できるように引き続き計画や内容を発展させる。
社会や音楽に関わる国内外の最新の知見や動向を踏まえた授業の内容の省察の成果を今後も実践に活用する。

７　エビデンス

（資料１）各科目のシラバス検索画面
http://syllabus.kunitachi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusSearchDirect.do?nologin=on
（資料２）本学授業アンケート結果
https://www.kunitachi.ac.jp/documents/introduction/data/disclosure/2025/questionnaire_graduate_2024.pdf